

二〇一九年(平成三十一年)三月

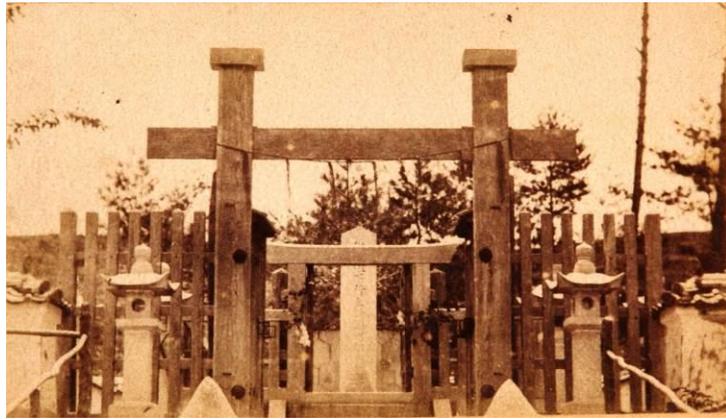
東京阿部家資料

文書編(9)

福山市教育委員会



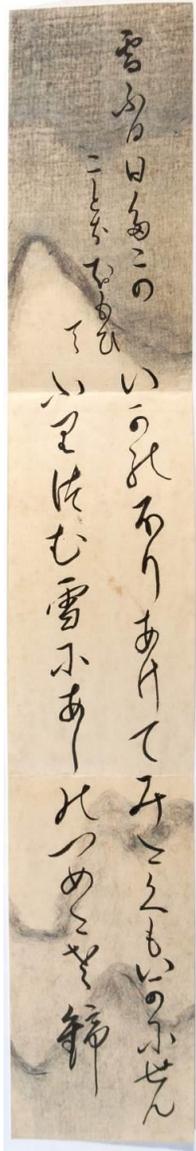
藤井松林筆 阿部正方画像



阿部正方墓（明治前半期頃）



同（現在）



雪ゆる日 たこのことほおもひて

いかのぼり あげてみたくも いかにせん ふりつむ雪に あしのつめたさ

錦



はじめてうみちかき家にまかり侍りて

海原の あまのつり舟 めづらしく きみの恵に けふみつる哉 正方

宝珠図



書「惟義所在」



おもひきや
 かかるところに
 たむろして
 このあらたまの
 春を見むとは
 正方
 (第二次長州征討三次滞陣中御筆)

目次

凡例

『正方公紀稿本』	1
『正方様御上京御道中御行列帳』	46
『申送帳』	62
阿部正方公仮養子願	75
正方様四品御礼録	77

凡 例

一 本書は、「東京阿部家資料」文書編(9)として、旧福山藩主阿部家(東京阿部家)から福山市に寄贈いただいた資料の内、『正方公紀稿本』『正方様御上京御道中御行列帳』『申送帳』『阿部正方公仮養子願』『正方様四品御札録』を収録した。

一 文書の収録については、原則として原文の形にそっようにつとめたが、読者の便を図るため、つぎのように編集した。

1 『正方公紀稿本』については、内容をより詳細にするために『正方公御事歴稿本』及び『福山藩主従四位下阿部正方』(いずれも東京阿部家資料)より抜粋したものを挿入した。

その際、『正方公御事歴稿本』から抜粋した箇所は
[]で、『福山藩主従四位下阿部正方』より抜粋した箇所は [] で囲んだ

2 繰り返し記号の「、」は通常の文字に改めた。

3 誤字や当て字は原則原文のまま記し、行間に()で適切な文字を記した。脱字と思われる場

合には(○脱)、また、不要な文字や意味の通らない文字については行間に(ママ)と記した。

4 判読できなかった文字は□とした。

5 欠損している文字は■とし、文字数が不明の場合には [] とした。

6 平出・欠字は省略した。

7 打消・加筆部分については、訂正が加えられた後の状況を示した。

8 漢字の字体については、原則として新字体を用い、異字・俗字等はつとめて通行の表記に統一した。

9 読点()あるいは並列点(・)を付けた。
一 本書の解説は、つぎの東京阿部家文書解説グループのメンバーに協力いただいた。

太田玲子 折田恵子 正田勝幸 石井清彦

林多恵子 山本明子 内藤快範

一 本書の編集は、福山市経済環境局 文化観光振興部 文化振興課 まなびの館ローズコム 歴史資料室の鐘尾光世・柏紀雄・桑田直美があたった。

正方公紀稿本



本資料は福山藩阿部家九代阿部^{まさかた}正方が藩主になってから没するまでの事歴である。

正方は六代藩主正寧^{まさやす}の三男として江戸に生まれ、兄で八代藩主の正教^{まさのり}が文久元年（一八六一年）に早世したため、同年に十四歳で藩主となった。

正方は、尊王攘夷、公武合体、長州戦争、開国倒幕、大政奉還と王政復古など、思想や政局が目まぐるしく移り変わった激動の時代に、京都警備・二度の長州征討・日光警護、また領国経営にと東奔西走することになる。

本書が多くの頁を割いて引用している、幕府や朝廷へ奉つ

た文書や諸藩とのやりとりの記録からは、当時の福山藩の尊王攘夷思想と、徳川譜代の藩としての葛藤が読み取れる。

慶応三年（一八六七年）十一月、戊辰戦争の前哨戦として新政府軍が福山城に迫った時、正方は患っていた脚氣が重篤となり、城内において二十歳の若さで病没した。混乱の中、死は秘されて仮埋葬され、現在の墓所（福山市北本庄）へ正式に埋葬されたのは明治三年のことである。尚、阿部家歴代藩主の中で福山の地に眠るのは唯一人正方だけである。

明治時代中頃、多くの大名家同様阿部家でも代々の事蹟編纂に取りかかり、七代正弘や十代正桓の事蹟がまとめられた。続いて大正十三年に『正方公御事歴稿本』が森弥三郎によって提出されている。本『正方公紀稿本』はこの『正方公御事歴稿本』と『本』内容がほぼ一致しており、同時期に同著者によって書かれたものと考えられる。

『正方公紀稿本』の翻刻にあたっては、『正方公御事歴稿本』と『福山藩主従四位下阿部正方』（ともに東京阿部家資料）の中で、『正方公紀稿本』にない箇所を抜粋し、凡例に示したように挿入した。

右『正方公御事歴稿本 上・下』
左『福山藩主従四位下阿部正方』



正方公紀稿本

從四位主計頭阿部正方ハ伊予守正寧ノ第三子ナリ、生母内山氏、嘉永元年八月廿一日江戸丸山ノ邸ニ生ル、幼名錦次郎、文久元年五月伊予守正教卒シ子ナシ、正方家ヲ繼キ遺領高十一万石ヲ受領シ、十二月十六日從五位下ニ叙シ主計頭ニ任セラル、時二十四歳

此年十二月十三日朝廷幕府ニ命シ諸侯伯ニ攘夷ノ事ヲ令セシメ幕府復侯伯ノ所見ヲ徴ス

正方未タ弱冠ナラスト雖モ亦奮ツテ建言スル所アリ、曰ク、今日ノ事タル宜シク全国一致シテ朝廷ヲ尊奉シ諸藩ヲ制シ以テ外国ノ処置ヲ決スベシ、故正弘深ク外事ヲ憂慮シ未ダ大ニ志ヲ伸ブルヲ得ズ半途ニシテ死ス、今若シ攘夷ノ命下ラバ願クハ先鋒トナリ、粉骨碎身以テ国恩ニ報セント、又藩士ニ訓諭スルニ此旨趣ヲ以テス

翌二年正月直書ヲ以テ家臣一統ニ左ノ旨ヲ達ス

旧臘於公辺勅意御遵奉攘夷御決定被遊別紙被仰出之趣誠

以恐入候事、就而者何時出勢可被仰出モ難計、当家之儀ハ三河以来之御譜代ニ有之、我等不肖之身ニ候へ共御代々様御遺訓ヲ守リ抛身命奉報御鴻恩度、殊ニ外夷之儀ハ良徳院様御勤役中ノ指纏、彼此御深慮御半途ニ而御逝去被遊御残念被思召候、右御遺志ヲ可奉継述時節到来ト存候、然ル処若年之場方此際ニ臨ミ聊而茂不行届之儀有之而者忠孝共ニ不相立次第ニ付、家中一致奮発精励我等ヲ輔翼シ、何卒諸藩ニ打越武威為相輝候働偏ニ令依頼、且銘銘存寄之次第モ候ハハ無腹蔵可申聞猶年寄共方モ可申渡候事

二月九日家茂公御婚礼御祝儀トシテ禁裡御所及家茂公へ二種一荷ヲ献ス、同月十六日大手門番大久保加賀守跡役仰付ラル

同三年二月左ノ建言書ヲ幕府ニ奉ル

此度勅意御遵奉被遊攘夷御決定被仰出候ニ付、銘々策略被聞召度間巨細ニ相認奉差上候様御達之趣、恐入奉畏候、私儀ハ申上候迄モ無御座若年愚昧之身ニ御座候間、御大

政之儀等実以テ思量ニ及不申儀ハ勿論之事ニ御座候間、可申上程之策略更ニ無御座候得共、昨年来追々御達之趣ニ依愚考仕候処、当時節ニ候ヘハ御全国御一致之儀最以御肝要之儀ト奉存候、此度攘夷御決定ニ相成候上ハ叡慮御遵奉被遊候御事故、外藩等之面々何レモ服従仕候事ニ而天下之人心一致仕候事ト被存候間、此上ハ乍恐益御誠実ヲ被為竭天朝御奉尊被遊自然之御威勢ヲ以外藩ヲ御鎮制被遊候ヘハ、自ラ御安全可罷成ト奉存候、外夷御処置之儀ハ誠ニ御大切之御事、旧臘攘夷之儀諸藩江御布告ニ付而ハ定而漸々諸夷共伝承可仕、左候時ハ自然足下ニ変ヲ生候モ難量候間、実ニ万事ヲ被指置御武備御専修被為在、諸藩へ巖敷御触達御座候御儀ト奉存候、私家之儀ハ三河以来三百年來奉蒙御鴻恩、且故伊勢守儀御役勤中夷船渡來仕深奉恐入候、其以來御国威相立候様日夜心配仕候処半途ニ而死去仕候次第ニ御座候間、右遺志ヲ相継此度攘夷之節ハ一藩必死ヲ以積年之御鴻恩万分之一ヲ奉報度ト存詰罷在候儀ニ御座候間、何卒御先手之内へ被指加

被下候様奉願候、勿論小藩之儀万事不行届ニハ御座候得共御軍役相応之御用ニ候得者、国力ヲ極め粉骨碎身忠勤仕度奉存候、且又風聞承候得者諸蛮共追々皇都ヲ志シ大阪へ渡來可仕哉ニモ伝承仕候、実否ハ不相心得候ヘ共、京撰辺御警衛御用ニ候ヘハ在所近之儀、人数・糧米・運送其外万端便利之地ニ而御座候間、何レ之御場所成共予メ蒙仰候ヘハ万事手筈出來別而難有仕合ニ奉存候、此段偏ニ奉願候、私儀何之見込モ無御座事々敷申上候モ甚恐入候ヘ共、奉蒙厚御沙汰候儀ニ付愚衷之儘不包奉申上候、誠恐謹言

月 日

阿部主計頭

右ノ建議ハ一応越前総裁ノ閱覽ヲ乞ヒ然ル後ニ呈出シタリ
 此年三月四日將軍上洛セラレ、三月十四日京都警衛仰木付
 ラレ同月晦日京都近郊山城八幡ノ警衛ヲ命セラル、此地固
 ヨリ京畿咽喉ニ位スルヲ以テ予メ地勢ヲ視察シ緩急ニ備ヘ
 ントス、然レトモ江戸城大手門ノ守衛旧ノ如クナレハ東都
 ヲ去ル能ハズ、因テ重臣数名ヲ差遣シ藩兵ヲ督セシム

諸嚴重申付ヘク勤方委細之儀者松平肥後守・牧野備前守
ヘ承合セヘク京師ニ於テ板倉周防守之ヲ伝フ

五月十八日禁裏守衛トシテ十万石以上ノ諸藩万石一人ノ
割ヲ以テ身体強壯行状善良ノ士差出スヘキ者仰出サル

強壯ノ士十一人ヲ選抜シ諸藩ト共ニ其任ニ当ル

甲長小倉與兵衛・監察大森操兵衛・内監察鶴岡吉之丞・
藤江治部・蜷川銚治郎・小田切豊・小野誠兵衛・高久伝
之進・今福新次郎・内藤音次郎・綱川馬之介

此時ニ当リ將軍家ハ帰東セラルヘキ内儀アリ、尾張重相ソ
ノ時宜ニアラザルヲ言フモ容ルル所トナラズ、是ニ於テ在
京譜代諸藩商議シ更ニ將軍家ノ滯京ヲ乞ハントシ桑名・高
田・大垣・郡山・淀ノ諸藩各建議スルアラントス、本藩ハ
安藤織馬・吉田助左衛門ノ老臣及ヒ用人新居又太郎・渡辺
三太平、目付大森操兵衛審議シ且ツ時日迫ルヲ以テ之ヲ江
戸ニ宣議スルノ暇モナシ、藩老名儀ヲ以テ左ノ建議ヲ為シ
タリ

上様御事今般夷族為御応懲御還府可被遊旨御一決相成候

段窃ニ奉拝承候、乍恐当節之形勢ニ而ハ此御一挙ニ而徳
川御家御浮沈相成可申哉ト誠以御大切之儀深く奉恐入候、
尤夷賊御拒絶ニ相成候上ハ渠必激怒仕諸蛮申合神州環海
来寇可及戦闘ハ必然之儀、就中摂海江乘入追々ニ京都へ
侵入可仕ト志可申茂是亦必然之勢ニ可有御座候、依而関
東ニ被為在候而茂即時御上洛御守衛可被遊御儀ニ可有御
座候処、幸御在京被為在候而此場ニ相成、右等之御顧念
モ無之御下関被遊候而ハ京師御手薄ニ相成候場方御敬上
之尊慮御薄ク御遠凶御乏敷形ニ相見ヘ、左候而ハ自然御
名義御忠節モ御立被遊間敷哉、且近ク御築地際ニ而異変
有之事共旁以御滯京御守鎮被遊、横港攘除之儀ハ皇命ヲ
以関東江急度御下知被遊候儀御当然ト奉存候、尤攘夷之
儀ハ皇国開闢以来之御大患殊ニ蛮夷ハ砲艦ニ富ミ戦争ニ
馴居候ヲ、昇平久舖不事馴兵器ヲ以忽卒及戦闘候事必定
御勝算可有之トモ不奉存上、綸言如汗乍御少算モ御遵奉
被遊全ク御違勅ニ相成候ヲ被恐入候御儀ト奉恐察候、將
又夷族侵入仕御一戦被遊候節、輩下御手薄ニ而万一御失

策有之候時ハ万国へ対シ未代迄之御国辱被為取、無此上
恐入候御次第ニ奉存候間、是非御直ニ御采配不被遊候而
ハ相成申間敷候、夫而已ナラス、唯今之時機暫時ニ而モ
皇都ヲ御離被遊候而ハ如何様之異変相生シ、公武之御疎
隔可相成モ難凶実ニ狼跋之御患、徳川御家之御武威神祖
御百戦之御大勲勞御当代ニ而御空敷相成候而ハ乍恐不勝
痛哭御儀奉存候、勿論斯ク相成候而ハ邦内割拠之姿ニ相
成、其障^(障カ)ニ乘シ夷賊愈侵入仕候時ハ防禦之力モ乏敷、夫
方シテ異心ヲ挟ミ禍乱又生スルモ不被計、其節ニ至リ候
而ハ如何様被為惱宸襟候而モ難被為及、皇統無窮万国ニ
卓越タル御国体モ夷賊ハ更ニ不憚、終ニ禁闕へ近キ候様
可相成ヤモ難計申上候モ恐多キ事ニ奉存候、右等之大患
其機漸々微頭仕候様奉存候、左候へハ当節御還府被遊候
ハ天朝公刃トモ幾重ニモ御不為ト奉存候、右之次第二候
へハ乍恐御寸歩モ京地ヲ御離レ不被遊、前文横浜港攘除
之義ハ一橋中納言様生殺与奪之権ヲ被為握、列藩之諸候^(候)
江皇命ヲ以急度御不知有之速ニ拒絶相成、勝敗ハ天ニ御

任セ被遊候外ハ有之間敷ト奉存候、是皆徳川御家之御為
而已ニ無之則皇国之御為、天朝并神祖江之御忠孝ハ全ク
天祖江之御忠節ニ被為当候御儀ニ奉存候、最早御還府御
治定ニモ相成候哉モ奉存候へ共、斯ル御大切之御事幾篇
モ御熟慮被遊候様奉願候、扱又右之趣ハ先達以来私共初
詰合之者種々苦心仕居既ニ御筋へ可申上哉ト申合居候へ
共、主人主計頭不經存意候事故踰等之義ト先以相控罷在
候へ共、時日相迫リ候ニ付不得止申上候、文意不敬之段
ハ偏ニ御宥免被成下、愚衷之趣御取捨被下候へハ難有仕
合奉存候、以上

六月二日

安藤 織馬

吉田助左衛門

右建議書ハ会津守護職及ヒ水野閣老ノ重臣ニ呈出シタリ、
然レトモ將軍家ハ九日京都ヲ発シ大阪ニ於テ軍艦順動丸ニ
搭シ帰東サレタリ

此時ニ当リ江戸在府ノ譜代諸候ハ將軍家ノ速ニ還府シ攘夷

ノ処分アランコトヲ希望シ、我公亦此説ニ賛同アリシヲ以テ京都ニ於ケル兩執政ノ建議ト支吾ス、(後略)因テ水野閣老ニ乞フテ建議ヲ取消シタリ

六月十九日大手門守衛ヲ解カル、是ニ於テ七月(六)日江戸ヲ(廿八)発シ十九日帰京シ直ニ天機ヲ伺フ

此行ヤ行列ノ御広間番式拾余人ヲ以テ君側ヲ固メ各ピストル銃ヲ持タシム、思フニ主公ノ意ハ勢州ノ心ヲ以テ心トナシ開國進歩ニ在ルヲ窺フニ足ルナリ

即夜鷹司関白使者ヲ以テ即刻來邸ヲ促ス、正方此時甫メテ十六ナリ、老臣代リテ行ントス、正方曰ク、卿等余ノ弱齡ナルヲ以テ応答機宜ニ適セザルヤヲ憂フルナラン、卿等ノ配慮亦タ宜ナリ、然レトモ既ニ家ヲ継キ方面ノ寄ニ当ル事苟クモ関東ノ御武威ニ関ハルアラバ一步ヲ曲ケザルベシト意氣凜然タリ、老臣感激俯伏シ涙座ヲ濡ス

参朝シテ列候ノ間ニ座スルヤ関白某侯ニ問フテ曰ク、彼ノ幼童未ダ前髪ヲ剃セサル者何人ナリヤ、其侯対ヘテ曰ク、阿部主計頭ナリ、関白曰ク、然ラバ故老中阿部伊勢

守ノ後カト、既ニシテ関白ノ演述畢リ列候皆退ク、正方独留リ進ミテ曰ク、正方面年少且性愚昧ニシテ尚ホ世上ノ事ヲ弁ヘズ、殊ニ今日入京シタルノミニテ未ダ近日ノ事情ヲ解セズ、下問ノ件敢テ再論ヲ請フト、関白乃チ席ヲ進メテ復タ演述ス

既ニ抵ルヤ関白延見シテ曰ク

攘夷ノ儀ニ付度々叡慮ヲ以テ関東江被仰進候趣モ有之候処、今ニ於テ何等ノ御請モ無之夫ニ付御親征モ被遊候得者、一同墳発弥攘夷ト可相成ト申説モ有之候得共、御親征迄ニ無之而攘夷可相成見込モ候哉

正方之ニ答テ曰ク、垂問ノ儀重大ナリ、篤ト熟慮ノ上奉答スベシト、乃チ辞シ歸リ老臣ヲ召シ諮問ノ次第ヲ告ケ且ツ曰ク、今ヤ一二外藩ノ士公卿ト結ヒ名ヲ攘夷ニ籍リ幕府兵馬ノ大権ヲ無視ス、若シ御親征アラバ幕府ノ武威地ニ落シ、斯ノ如キハ譜代臣子ノ忍フ能ハザル所ナリ、卿等能ク余ノ意ヲ体シ答書ヲ草セヨ、是ニ於テ老臣別室ニ退キ答書ヲ草シ正方ノ親閱ヲ仰キ書ヲ作り之ヲ関白ニ致ス、其辞ニ曰ク

謹而奉言上候、昨夜不存寄被召寄被仰渡候攘夷一条、関東江被仰遣候趣モ被為在候へ共未夕御請無御座、就而ハ御親征モ被遊候ハハ諸方人心奮発御成功可被為在ト申説モ御座候得共、御親征迄ニ至リ不申共攘夷之出来候考ハ無之候哉トノ御旨蒙御尋恐入難有奉存候、素方若年愚昧之私可申上程之見込ハ無御座候得共、折角蒙仰候儀ニ付家来共ヘモ内々申聞乍不及篤ト勘弁仕候処、何分御国内一和闔国之全力ニ無之而者攘夷之御成功無覺東奉存候、仍而者幾重ニモ関東遲緩之場ヲ御尋問被遊度、天下諸藩ニ於テモ此一藩ハ攘夷之見込強ク彼一藩ハ更ニ其志無之ト申様異同御座候而ハ、詰リ御国体ニモ相係リ候而已ナラズ攘夷之御成功相立申間敷ト奉存候、前文関東之御請何故遷延仕候哉、其段ハ相心得不申候へ共、昨年関東へ勅使御下向後勅意御遵奉攘夷御一定之儀ハ既ニ天下江御布告ニ相成、右之儀ニ付勅意之通必御請ニ相成可申、其上帝都近海御守衛仕候向ハ不申及、諸方海岸外夷入寇之要衝ニ当リ候向々江此上実地ニ武備相整、夫々戦略モ被

仰聞度旨関東江被仰出候ハハ何方モ必死ニ成行可申、左候ハハ闔国之全力ニ而夷賊掃攘之場ニモ至リ可申哉ト奉存候、万一関東之御請ヲ不被為待御別段之御沙汰被仰出候様ニ而ハ諸藩見込区々ニ相成天下人心錯乱仕、矢張御国内一和闔国之全力相整不申ハ勿論之儀、且右様相成候而ハ関東御職掌モ相立不申実ニ恐入候義ト奉存候間、兼而難有勅意被仰出モ御座候通、関東御扶助之思召ヲ以、猶此上御沙汰被仰進右之御受被聞召候上、兎モ角モ御聖断被為在度奉存上候、以上

七月廿一日

阿部主計頭

廿二日参内、天顔ヲ拝シ御盃ヲ賜フ

八月二日八幡へノ御暇賜ハリ帰營ス

八月五日八幡ニ着シ地勢ヲ視察シ而シテ参府ノ期近キヲ以テ廿三日発程帰東セントス

十二日夜親征ノ詔勅下ル

今度為攘夷御祈願大和行幸春日社御拝暫御滞留、御親征軍被為在其上神宮行幸之事

十七日ニ至リ右詔勅ハ三条実美等ノ偽作ナルコト露レ而シテ此事長州藩士ニ関聯ス、因テ堺町御門ノ長藩守衛ヲ解キ、十八日鷹司閔白以下ノ参朝ヲ禁シ長藩士ノ在京ヲ止ム、是ニ於テ三条・東久世等ノ七卿長人ト共ニ西走ス

此時ニ当リ吉田老職京ニ在リ、急ヲ八幡ニ報シ又会津守護職ヨリ正方ノ入京ヲ命ス、十九日弘暁正方諸隊ヲ率テ上京シ直ニ参朝天機ヲ伺ヒ命ヲ受テ南門ヲ守ル、翌日軍ヲ八幡ニ班ス、此日朝廷ヨリ左ノ御諮問アリタリ

攘夷之儀幕府之不待示命速ニ掃攘可有之事

幕府ノ示命ヲ待タズ掃攘ヲ為スノ諮門(四)ニ対シ、七月廿一日奉答ノ趣旨ヲ再陳シ

廿六日召ニヨリ参内、天前ニ召サレ二条内府ヲ以テ變動之節御守衛之段叡感被思召之趣ヲ口達アリ、且ツ野宮伝奏ヲ経テ御持古ルシノ末広一本・絹五卷ヲ賜ヒ又引率ノ家臣ニ金弊ヲ賜フ

廿七日攘夷ノ儀ニ付左ノ答書ヲ奉ル

去十九日被仰出候叡慮之趣難有奉畏候、乍不及精力相尽

勤上可仕ト念願仕居候、然ル処乍恐不待幕府之示命ト之御旨ハ関東譜代私共之身分ニ取候而者於情義不堪悲歎、唯々恐入候計ニ奉存候、若シ関東ニ而此上ニモ掃攘遅延ニ相成候ハハ如何様ニモ仕、勅意貫徹仕候様相尽可申ハ勿論、右御成功者先達閔白殿下江御受申上候通諸藩一致之全力ニ無之而者不相成事ニ奉存、且於関東モ既ニ鎖港之御談判御取掛ニ相成候趣御触達モ有之事故、猶関東御職掌之場ヲ御憐察被遊、前書勅意之通於関東早々諸藩不洩様御布告ニ相成候様此上御取成之程奉懇願候、是等之趣乍憚聊モ姑息苟安之心中方申上候義ニハ毛頭無之只々皇国之御為筋ト奉存、且私場合不得已之情実申上候儀ニ御座候間、偏ニ御憐察被成下度奉願候、以上

八月廿七日

阿部主計頭

右野宮伝奏ニ呈出セシニ、朝議一変シ攘夷之儀都而得幕之指揮候様被仰出

九月朔日八幡ニ帰營セラル、而シテ幕廷モ亦京都時變ノ勞ヲ賞シ御時服五ヲ賜ヒ、従行家臣ニ御賞詞アリタル旨江戸

藩邸ヨリ通報アリタリ、十四日選士拾一人ノ守衛ヲ免ゼラレ帰国ス、而シテ会津守護職ヨリ近畿未タ全ク静平セザルヲ以テ参府ヲ延期アルベキノ知照アリ、之ヲ江戸ニ稟議シ聽許ヲ得タリ

十二月廿七日將軍家江戸ヲ発シ上洛ノ途ニ就カル、正方之ヲ大阪ニ迎フ

元治元年甲子正月二日家茂公海路御上洛ニ付人数差出天保山辺ヲ警衛スベク公達アリ、七日家茂公御着阪ノ節安治川通備前島ヨリ坂城ニ至ル迄会津藩・彦根藩ト共ニ其両岸ヲ警衛ス、十一日途上家茂公ニ謁見シ御上洛前驅仰付ラル

元治元年正月八日將軍家御着、正方家臣ヲ引率シ会津・彦根二侯ト共ニ路上ヲ警メ、十三日正方大阪ヲ発シ十四日帰京十四日將軍家大阪城ヲ発シ入京セラル、正方之方前驅タリ

十五日家茂公着京ノ節二条城へ詰メ東御門外へ出迎謁見、十六日家茂公参内ノ節供奉願ノ通仰付ラル、廿一日

家茂公参内ノ節御道筋へ人数差出警衛スヘク酒井雅樂頭之ヲ達ス、廿一日正方二条城ヨリ供奉参内天顔ヲ拝ス、廿二日御参内滞リナク済セラレ御祝儀トシテ登城御座間ニ於テ謁見御懇ノ上意ヲ蒙リ大広間ニ於テ酒饌ヲ賜フ、廿七日家茂公参内、正方供奉参内前日ノ如シ

將軍家此行ヤ実ハ征長ニアリ、外事切迫ノ時ニ当リ国内干戈ヲ交ユルハ皇国ノ不利ナルヲ以テ此月在京重臣山岡・安藤・吉田ノ老職ハ左ノ意見書ヲ守護職会津侯ニ呈出ス

此度御上洛ノ上ハ公武御一和之御取固メヲ始攘夷之緩急等御廟議御決定勿論之御儀ト奉恐察候、長藩之御処置如何御裁断ト相成可申哉、万一余リ御嚴重之御沙汰ト相成候而ハ彼是差纏出来遂ニ御威光ニモ相拘リ候モ難計、畢竟御嚴罰ニ而御威光可相立筈之処却而御威光被為損候而ハ以之外奉恐入候事ト奉存候、全体長州侯最初於関東之御建白ハ一際目立候様天朝ヲ御遵崇被遊公武御一和御專務ニ有之、国之開鎖ハ時宜次第之儀ニ御座候トノ御説、右ハ誠ニ憂国之御実情方出候段明白御座候処、半途方説

ヲ被變攘夷一途ニ御見込剩其戰期迨御催促ニ相成候、尤右ハ關東之御模様何分御因循ニ而武備相整候見当モ無之ト被存、無処之場方起全叡慮御遵奉之御忠勤共可申上候得共、公武之御一和無之而ハ御国内四分五裂割拠乱世ト相成、又々宸襟可被為惱之筋ヲ御懸念モ無之、戰守諸藩応接等之打合御行届モ無之容易ニ兵端ヲ被開候段、皇国御為筋之御積ト乍申御成功無之、只様彼是紛擾相増候而ハ却而皇国之御不為筋ニ有之、公辺江被為對而之御不敬不及申、天朝江被為對候而茂詰リ御不忠ニ当リ可申、此場ヲ以屹度被仰出候ハハ長州侯平心ニ御自省有之候而先以御申訳無之筈ニ御座候得共、昨年来長藩之御拳動ヲ以勘考仕候ニ右被仰出中々穩ニ承伏ハ有之間敷ト奉存候、元来之処關東ニ而外夷通商ヲ天朝へ御伺之詮無之、御伺濟ニ不相成内ニ仮条約為御取替ニ相成候方御逆鱗之御事、詰リ關東ニ而ハ乍恐被仰訳無之御次第、右ニ付外夷御取扱之御役人方段々御咎被仰付候、乍去外夷江被對而ハ夷狄トハ乍申既ニ条約御濟之上ハ、手之裏ヲ返ス様御取戻

モ出来兼候御義理合有之進退御頓着之折柄、叡慮ニ於テハ開闢以來夷狄ニ不被汚候神州ヲ、今上之御世ニ被為至右様之儀御座候而ハ祖宗へ被為對御濟不被遊ト攘夷之思召御堅固ニ御据被為在、斯ル処江、慷慨志士平日公辺御処置ヲ不滿ニ在居候族又ハ客氣輕卒一時ニ逸リ候輩關東交易之利ニ御溺レ有之天朝ヲ御蔑視被遊候ナド紛紜申上堂上方へ持込、終ニ叡聞ニ達シ叡慮ヲ被為惱諸藩へ御内勅下リ候儀初リ申候、是モ乍恐關東御不行届之廉々被為在候方之儀自然無余儀之情勢斯様之御場合ニ及申候、然ル中ニ長州侯別段ニ奮然確乎ト攘夷ヲ御主張有之候得ハ叡感不斜思召候御訳方、何モ關東ヲ御見棄ハ不被遊候へ共長州ヲ頼母敷思召深ク御依頼被遊候之極自然之勢、諸事周旋ヲ御委任モ被遊候次第之成行ニ候、長州ニテハ此処ヲ根拠トシテ諸事追々過激之御所業ニモ被及申候、定而叡慮ニハ夫迨ニハ不被思召事迨モ武断御踏込ニ相成申候是近來之事情ニ御座候間、長州之御所業一々叡慮ト符号ハ仕間敷候へ共、結局開鎖和戰之処全ク叡慮ヲ御遵奉

之儀ニ而叡慮ト表裏反對之御所業ニ無之候、左候ヘハ彼是箇条ヲ数立候而其罪ヲ鳴シ御罰シ可有之候共、長州ニ而ハ是モ叡慮ヲ遵奉方致候儀、彼モ勅意ニ基キ相働候訳杯ト理屈ヲ付候而御弁解一々可有御座候、概論仕見候ニ其心術ヲ以申セハ、太平之恩沢ニ浴シ三百年來頭上ニ戴居候關東ヲ俄ニ足下ニ輕蔑シ、公武御一和ヲ取持候所業ニ無之却而公武御隔絶ニ可相成様之所業ヲ被致、且攘夷成功之見留モ無之輕々敷兵端ヲ被開、近頃ニ及候而モ無改心旧臘薩船ニ向ケ発砲有之等、都而行末皇国之御為筋第一トハ乍申真個之誠実ハ無之、国家内乱ヲ引出スニモ無頓着、自己之私憤押貫可被申候模様、天朝并關東江不敬不忠重々可惡之儀御座候ヘ共其縦跡ヲ以申セハ諸事叡慮勅意ニ基キ而之働キト理屈付キ可申、勿論初之処叡慮長州江御依頼委任被遊候御事ニ御座候ヘハ、長州候実情感激奮発之場ニモ御座候ヘハ容易ニ取挫ハ出来申間敷、此方ニテハ八月十八日以来勅書如斯ニ候ヘハ、十八日以前之叡慮ト申ハ皆十三卿長州嬌命之所為也ト責立候

得ハ、彼方方ハ去十八日以前ニ斯様之勅旨奉蒙候得者夫ヲ真之叡慮ト心得候、綸言如汗左様ニ御替リ可被遊筈無之、十八日以後之叡慮ト申コソ傍方誣付御勸メ申上候矯命ニ候ト申張、所謂水掛喧嘩ト申姿之論弁差纏可申候ハ必然ト被考候、終ニハ御一人様方前後ニ様之勅旨下リ候杯ト玉体江御不明之御名ヲ奉為負候様成行、可申奉恐入候事ニ御座候、其内長州ニ而ハ公辺方被遣候御目付ヲ殺害、公辺ノ御船ヲ横領致候等ハ、如何様之弁説被致候而茂蹤跡ニ於テ弁説之付兼候次第モ随分可有御座候ヘ共、全体之大主意皆勅意御遵奉申上候ト申立候ハハ、公辺御武威十分ニ無之候而ハ逆モ御取挫ハ立派ニ参間敷、立派ニ参リ不申時ハ折角御嚴罰被仰出候甲斐モ無之、却而御威光可被為損ト恐入過慮仕候、且一旦御嚴罰被仰出御先方御承伏無之候ハハ元方直ニ御討伐ト相成可申、其節ハ何レ諸藩江討手可被仰付、当時諸藩之見込如何可有御座、於諸藩何方モ長州不届至極ニ付御討伐至極御尤ト奉存罷在、私一手ヘ被仰付度私江御先鋒被仰付度杯ト申模様ニ

御座候ハハ、軍中一和兵氣相振候而其成功申迨モ無御座候得共、右様見込確然相据居候諸藩モ可有之歟ハ不在候得共差向不承、却而長州近国之大藩杯ハ長州之擯斥被致候ヲ無事ニ取扱度其旨建議有之候哉ニ風聞承リ申候、実以斯様之情勢ニ御座候而ハ諸藩終ニ官命奉畏候而出軍ニ及候共戰不申以前ニ既ニ氣折罷在、其上ニ客戰長陣自然ト疲弊退屈更ニ御武威相立申間敷、長州ニ於而ハ討手御指向ト承候得ハ窮鼠食猫之情態、既ニ死地ニ陥リ御奮激方防長二国之全力ヲ以相防可申、往昔国初士氣奮発之頃迎モ聊之島原一揆ヲ討平ニ半年ヲ費シ申候位之義、窮鼠ヲ取挫候ハ容易之事ニ無御座、殊ニ此戰爭勝利有之候而茂当然之筋何モ益モ付不申、若敗北ニ及候ハハ乍恐悶東之御武威ハ地ニ落可申、又近頃諸藩之形勢情合ヲ以勘考仕候而一統疲弊困窮、旁一旦世上戰爭相始リ申候ハハ何方モ銘々自国大切ト割拠身構之姿ニ相成、参勤交代等被仰出候通ニ相勤候向ハ無之様成行可申、是又長州御征伐御考モノノ一大箇条ニ御座候、又況当今外寇ヲ引受居

候御国内同士打軍、外夷ハ我内乱ヲ傍觀致所謂漁父之利ヲ得可申ト手ヲ拍テ相喜、其虚ニ乘シ種々之手出ヲ以御国難ヲ相増シ可申、從來斯様御国内紛紜混雜仕候ハ皆外寇之禍有之故ニ御座候、斯様外寇有之候上ハ御国内ハ申合互ニ勘弁如何ニモ睦敷相成不申而ハ不相成儀、兄弟鬩牆外禦其侮ト申事同船濟河胡越一家ト申事モ有之由承申候、実ニ当今同士軍ハ御失策ニ可有御座、明日ニモ外寇襲来仕候ハハ諸藩中長州之如キ奮発ハ沢山有之間敷、皇国之御為決而被棄申間敷奉存候、將又右之通申候迎、有罪之長州ヲ其儘ニ被指置候而可燃ト申積ニハ決而無御座、何レ一際御威光相立可申様被仰付可有之ハ勿論ト奉存候、只々前文之訳柄ニ付嚴密ニ罪状ヲ数立而被仰付候ハハ別寛大之御処置可然奉存候、近日桜田上巳之変一条ニ付而茂其節即日ニ御処置当否ハ暫指置、追々夫々改易之御所置候而茂諸侯之横死ハ改易可被仰付之筈之処、其儀無之滅高被仰付而已、又公儀之重キ御役人へ及狼藉候者ニ候ハハ伏誅ハ当然之理ニ候へ共、其情合来歴ヲ以御勘弁

追而格外之御赦被仰付候様、大事件常律有之者迎_マ時之
 権宜ヲ以定律ヲ变化活用之御先蹤_マ御座候得者、此度長
 州之御処置御仁恕寛大有之候_マ、決而御威光相崩レ候氣
 遣ハ有御座間敷、左候得者如何程之御処置ニ而當時ニ相
 当可仕哉、其処ハ幸ニ諸大藩立入取扱度トノ建議モ有
 之、左候得者ハ其方々江御取扱ヲ御委任被遊、其上ニ而
 御裁断御座候得者、緩急寛猛何レニ偏倚致候共取扱候人
 江御委任之儀ニ御座候ヘハ人氣モ揺動不仕、随而御紀律・
 御威光相立可申ト奉存候、此外ハ於公辺只々叡慮御遵奉
 ヲ以公武御一和相薄ラキ不申様之御所為第一急務ニ可
 有御座、右御処置ト申而別ニ新規之御挙動可被為在_マ、
 無之、公辺ヲ始諸国風俗質素士氣憤発、軍備攘夷之基本
 相立候様御新政実地ニ御執行被遊候ハハ、諸方目ヲ醒シ
 此ナレハ追追攘夷モ御出来可相成ト長州之畏服ハ不及申、
 其他不服之徒或ハ可有之候共感佩服可仕、左候得者天
 朝之御依頼盤石之御堅固ニ而内乱出来之氣遣無之、外寇
 モ御制シ易キ義ト奉渴望候、右丈ノ御備ハ元方攘夷ニ限

リ不申縦ヒ開国之御廟議ニ相成候共御必用之御儀、何時
 ニ而茂戰爭出来可申之備有之而コソ開国和親モ無事ニ相
 続可申、其備無之時ハ開国モ無事ニ出来不申候、斯様之
 儀都而世話申釈迦ニ説法ニ而重々恥入恐入候次第ニ御座
 候ヘ共、乍愚在モ御為筋ニ拘リ候事柄不顧失礼先生追存
 分申上候、畢竟平生御親切ニ相成居候方申出候事ト不惡
 御諒察御取捨可被下候事

子正月

右意見書ハ先ツ水野閣老ノ重臣岩崎彦右衛門ノ一覽ヲ乞ヒ、
 然ル後ニ会津主護_④ノ臣小野哲之丞ニ提出シ主護職ノ内覽ヲ
 経ル手續ヲ了セリ
 然ルニ二月十一日終ニ長州問罪ノ御征伐可被仰出ノ内旨ア
 リタレハ、山岡重役ハ更ニ左ノ意見書ヲ提出シ以テ公辺ニ
 対シテ征長ノ挙再応ノ熟図アランコトヲ乞ヘリ
 乍恐内々奉申上候、昨夜於殿中主計頭へ御書付ヲ以被仰
 渡候御内意之旨、主計頭恐入厚奉畏候、且又右御内意之

御事故家来一人限り相咄決而他言不致様ト御舎之旨モ承知仕、帰宅後内々私へ申聞候事ニ御座候、尚又主計頭申聞候ハ、乍愚昧段々相考候ニ、此度御上洛ニ付而ハ世上一統之人氣攘夷ハ如何可相成哉、長州御処置ハ如何可相成哉ト、此二箇条ヲ人々耳ヲ欽罷在候儀、然処攘夷之事未タ何トモ被仰出無之候而長州御処置振自然世上江相洩候ハハ、関東之御為筋如何可有之哉、風聞ニ承候ニハ横浜鎖港御決着既ニ外国江其旨被仰遣之使節モ出帆致候由、左候へハ先速ニ此事御布告ニ相成元来之叡慮貫徹致候段世上へ為相知置、長州ニ而茂人心ヲ動揺可為致之端緒無之様被成置候而、其上ニ而長州之御処置ニ御取掛御座候方、御施設之前後ヲ被為得候者ト奉存候、若此前後右之通ニ無之而万一長州御嚴重之御処置有之様子杯先ツ相洩申候ハハ、公辺ノ御懐合ハ誰モ不存候間一途ニ元来之叡慮ヲ御押止被遊、徒ニ長州ヲ御惡ミ之様ニ世上申立人氣騒々舖相成如何様ニ事変候モ難計、長州御処置振之見込ハ暫差置而右二箇条前後之処差向斯様ニ奉存候、右ハ公

辺十分御顧慮被為届候御儀ニハ可有御座候へ共、貴藩ニ而昨日被仰渡候御内意一条御承知之御方迨私方内々申上置候様主計頭申聞候事ニ御座候、若シ太守様へ被仰立モ被下候ハハ主計頭ニ於テ別シテ難有奉存候、以上

二月十二日

山岡治左衛門

右意見書ハ会津主護職ノ老職神保内蔵助・有馬閣老ノ重役有馬帶刀ノ受理スル所トナリタレバ、幕廷有司ノ一瞥ヲ經タルナランモ征長ノ何等変更スル所ナシ

幕廷既ニ征長ニ確定スレハ領土ノ守備猶予スヘカラス、

二月十五日二条城ニ於テ謁見、十九日始テ福山へノ暇ヲ賜フ、此日紗綾十卷・御馬一匹ヲ賜フ、廿三日京師ヲ発シ四月三日帰国ス

三月廿三日当秋在京順年之処免セラルル旨神保伯耆守之ヲ達ス、四月九日医師森養竹医学館講書年来出精二付五人扶持賜ハル旨井上河内之ヲ達ス、十四日重臣安藤織馬八幡・山崎関門修築御用御雇中二十人扶持御手当金拾五両宛賜ハル旨京師ニ於滝川播磨守之ヲ達ス

五月四日京師ニ於テ奉書到来、因テ名代松平伊予守登城
シ正方当春供奉相勤ニ付四品ニ叙セラル

因テ帰城ヲ出願シ廿四日其許可ヲ得テ候、四月三日帰城シ
領内ヲ巡見シ軍備ヲ嚴ニシ長防ヘ探索ヲ放チ、又在京ノ士
ヲシテ幕旨ノアル所ヲ審ニセシム、此時朝廷ニ於テ左ノ被
仰出タリ

大樹上洛列藩建議之趣モ有之、国是御治定ニ付先般被仰
出候通り一切幕府ヘ御委任被遊政令一途ニ出候様ニトノ
御趣意ニ候、列藩ニ於テモ先前ノ如ク幕府ノ指揮ニ可隨
旨御沙汰之事

是ヨリ先キ武田耕雲齊・藤田小四郎等ノ天狗党ハ長藩桂小
五郎ヨリ贈レル軍資千両ヲ得テ再ビ兵ヲ挙ケ両野ノ地ヲ横
行シ所在富豪ヲ掠メ將ニ横浜ノ外国人ヲ襲ハントス、而シ
テ京師モ亦浪士出没シ人心騒然タリ、時情日ニ危殆ニ傾ク
ヲ以テ六月主君ハ左ノ建議ヲ為シタリ

私儀当春於京地蒙御内命御暇奉願帰邑仕乍不及相応之御
用モ可相勤ト彼是勉強心痛仕候処、頻年物価沸騰借財相

崇中々存分武備相整兼奉恐入罷在候内、近頃紛紜閭巷之
風説外夷長州ヘ来寇可致模様、又日光山ニ攘夷相唱ヘ
候一揆嘯聚之条伝承仕廟堂御配慮之程奉恐察候、私共御
大政之儀ヲ臆度可仕筋無御座候ヘ共、日夜杞憂之余リ家
来共ト商議仕若年不肖之身ヲモ不顧鄙誠之趣奉建白候
先以先達而中御在京之処御首尾能御還府之御暇被為蒙仰
御機嫌能御着城被為在候事恐悦至極奉存候、当春御上洛
早速御転任被遊候ヲ奉初、御参内毎々御懇之叡旨被為蒙
御一和御親睦ニ被為渡、長州御処置迨御委任被仰出御政
令一途ニ出候御模様ト被為成候旨奉拝承候、昨年中迨ハ
諸藩不待幕府之示命窮力可致等之勅諭被仰出、私共不堪
悲歎伝奏衆迨愚意献言仕候儀モ御座候処、此度ニ至リ御
武威被為立近年來之雲霧快晴仕候心地、臣子之分恐悦至
極難有仕合奉存候、右ハ全旧來攘夷之叡慮御遵奉被遊不
経数年征夷之実被相行候トノ勅諭ヲ御担当、速ニ横浜鎖
港可被遊御請被仰上候方之御儀ト奉恐察候、然ル上ハ何
ヲ被指置候而茂横浜鎖港ハ速ニ御取掛被遊度奉仰望候、

若右一条御奉跡天下江明白相顯不申而ハ人心疑惑橫議沸起仕、且ハ叡慮之程モ又々如何可被為成哉難計乍恐過慮痛心仕候、万一攘夷鎖港差向無御拋御受被遊候へ共、元來無算之攘夷迎モ五七年内ニ御成功可被遊事柄ニ無之、殊ニ無謀之攘夷致間敷トノ勅意有之候上ハ先々はニ而落付、右猶追々之事ト申様姑息偷安之說等御座候而ハ全ク上江御食言之罪奉為負候不敬不忠以外之事ニ御座候、昨年五月十日限攘夷之御請被遊一旦御布告有之又御改令有之、遂ニ長州砲発一条可否差纏出来仕候覆轍可戒事ト奉存候、迎モ始終攘夷被遊兼候ハハ最初方到底御受不被遊候外無御座、既ニ御請被遊候上ハ最早戰爭之勝敗廟算之有無等寛々御顧慮可被遊御場合ニ無之、断然御決心御踐言可被遊御儀ト奉存候、左様無御座候而ハ御名分御大義相立不申、此後如何様御逆鱗ニ被為觸候而茂御分疏被^聞上様無御座候、尤此辺之事理ハ凡人具眼ニモ明了相分り居候事ニ付、御役人中斯様之陋説ヲ以御聰明奉惑候人ハ万々無之御儀、只々鎖港二字口上ニ而ハ容易ニ被唱候へ

共夷地之上ニ而不一ト通り御大業ニ付、其御施行御手順有之儀方自然因循仕手延ニ相成可申哉ニ候へ共、当今物価沸騰士庶困窮ハ是三港交易之弊ト人心動揺罷在、加之国体主張之士過激好事之徒策略有無ニ不抱^拘一樣攘夷ヲ相唱、天朝ハ到底攘夷之思召、幕府ハ到底開港之思召ト存詰居候間、此度天朝無謀之攘夷致間敷ト被仰出候ヲ御口実ニ、幕府定而依旧御因循必鎖港之御執行ハ被為在間敷杯御誹謗申上居候模様、現在日光山之一揆ハ一証ニ御座候、斯様之時勢ニ御座候へハ此上御手延時日押移候得者、過激輕拳之輩必夷館江斫入、我方無名之兵端ヲ開キ天下是方相乱可申、去迎此輩容易ニ討平難仕、畢竟盜賊嘯聚之類ト違ヒ勢利富貴之為メニ事ヲ企テ候ニモ無之、各身命ヲ抛報国尽忠之志ニ而蜂起仕候者ニ御座候得者、一旦伏誅仕候共其志ヲ継候者不少東滅西起南散北聚際限有之間布、勿論諸藩江討手被仰付候共諸藩必シモ愉快名誉ト仕間敷、既ニ長州之御処置御寛大ヲ至当ト見込候藩多ヲ以大概差見申候、且又御廟議鎖港御据リハ被為在候而茂

昨冬外国へ右為談判使節被遣有之、其帰朝無之而ハ御手始付不申トノ御都合御座候歟共奉存候へ共、使節ノ帰朝何日之事ニ可有之哉茫然目途相立不申、何レ不便之事ヲ被仰遣候儀ニ候へハ其談判容易ニハ相済申間敷、夫ヲ只管御待被遊居候ハハ姦猾射利之商売只今之内ト益交易ニ趨可申、随而諸品愈高値庶民益困窮可仕旁以過激輕拏之徒必足下ニ大變ヲ生出可仕、既ニ京地ニ於而御請被為在候御事ニモ御座候間、一日モ速ニ鎖港御取掛、天下注目公辺此度ハ必攘夷御成功可被遂ト奉存上候様不堪至願候儀ニ御座候、但右ハ差向人心不服内乱発出可仕候目前急患之場ヲ以奉申上候へ共、全体之処攘夷之御請被遊候御儀御国体方御据被為付、長崎之外夷舶碇泊無之様御旧典ニ御回復被遊、右御手順第一横浜鎖港方御初ニ可有御座儀と奉存候、又鎖港之儀彼必不承知ニ而軍艦ヲ以恐喝仕候歟、弁説ヲ以償金ヲ貪候歟ニ出可申、償金可被遣筈ハ勿論無御座、軍艦恐喝ハ素方御覚悟之御儀何レ此方ニ而戰爭覚悟仕居不申而ハ、彼只管跋扈申募際限無之平常

交易モ左様御座候、況鎖港談判ニ至而ハ迎モ戰爭之上ニ無之而ハ事成就仕間布候間、早々其御手順ヲ以横浜神奈川方江戸海岸住居之向ハ、彼襲来之節細民・老幼・婦女子之立退場所御割付被置、諸兵屯所等大抵只今方御触出被置、且糶糶・運送相絶可申ハ必定ニ付、御府内米穀・塩・鼓之貯蓄并近国川船運漕之營弁等御世話可有之、譬ハ利根川之水源新瀉川(信濃川)之水源ト南北相隔山越十二三里、陸運之路相開候得者越後米川船ニ而江戸へ入可申由、仙台之米(阿武隈川)逢隈川ヲ白川江積登七白川方野州阿久津迨二十里馬脊馱送致候へハ、阿久津方利根川へ下シ是又奥州米川船ニ而江戸入可申由、此類之御処置如何程モ可有之、且江戸・大坂海岸初諸国枢要之地夫々警備益嚴重被仰出、長州之如キ当今公武江過激之罪ハ可有御座候へ共、一方之要衝防禦被仰付其戦功之次第ヲ以旧事ハ悉御宥恕可被仰付、辺陲離島之類ニ至リ而ハ決而疎薄ニ可被遊思召ハ無御座候へ共、内外遠近之差別ヲ以京師へ痛痒関係之緩急有之候間、都会近海同様ニハ御手難被為届、自然一時外

夷之御汚辱ヲ取候儀有之候共、内地根本強実ニ相成居候へハ早速取戻シ候儀出来可仕候、実ハ天朝方被仰出之通無謀之攘夷不被遊、武備十分御整四方辺陬迨防禦筋無御遺憾候上ニ而御発シト相成候へハ、先勝而後戦之訳ニ而兵家当然之理ニモ可有御座候へ共、古昔以来夷船ヲ処置致候ニ、勝算之場ヲ顧慮シ一時権宜ヲ以事ヲ延シ、其内ニ武備相整一掃擯斥可致予算ニ而終ニ亡滅ヲ招候、此等ヲ以勘考仕候ニ、此後幾年相立候共矢張同様之訳ニ而有謀勝算之攘夷ト申ハ無覺束義ニ御座候間、離島末地ニ御懸念被為在候共何分戦期無之候而ハ何日迨モ士氣引立不申、武威相整候見留付不申、此上ハ御見計速ニ戦期御定ニ相成外夷へモ鎖閉之趣被仰渡、其期ニ至候而茂在留之夷人引取不申或ハ夷船渡来候へハ、天下之大義ニ根拠シ無ニ念御打払之事ニ相成度奉存候、斯様相成候上ハ四方海岸戦争相初候共御国内五畿七道人心一致、勝敗変化仕居候内ニハ神州之義勇ヲ以必彼ヲ一掃可仕様ニ相成可申、左候得ハ神州之武万国ニ輝キ幕府御威光赫々御盛昌ト被

為成、難有仕合奉存候、呉々先横浜鎖港御決心之事跡速ニ相頭レ、公武永久御一和傍方彼是間然仕候儀無之様偏ニ奉禱上候、私儀三河以来御譜代之列ヲ汚シ罷在、当節柄心底差扣罷在候而ハ却而不忠ト奉存、御求言之御趣意ニ相狎不憚忌諱乍恐鄙誠之儘奉申上候、宜奉願御諒察候、誠恐誠惶謹言

六月

阿部主計頭

右建議書ハ一橋卿・会津守護職ノ閱覽ヲ乞ヒ然ル後ニ呈出スルコトト為シ、大目付斎藤甚右衛門ヲ上京セシメ、七月三日会津侯ノ用人野村左兵衛・一橋家ノ用人原市之進ニ就テ其手續ヲ了シタルニ、会津侯ハ此建議ヲ觀テ時宜適當トナシ、尚一通ヲ稲葉閣老へモ提出スヘシ、而シテ其手續ハ予ニ於テ之ヲ取計フトノ内意アリタリ

此時ニ当リ長藩国老福原越後・国司信濃・益田衛門佐等千余ノ兵ヲ率ヒ来リ、伏見・天龍寺・山崎ニ分署シ京都在留ノ各藩臣求ムルニ、七卿復職毛利宰相父子ノ入朝許可斡旋ノ事ヲ以テス、七月七日閣老稲葉侯ノ召ニ付斎藤甚右衛門

二条城ニ出頭ス、公用人伊沢右馬允ヲ以テ長藩人引取方論
說ニ付左ノ書付ヲ交付シタリ

長藩士等頃日出願有之趣ニ候へ共、多人数兵器等携所々
致屯集甚不穩、元來於長州ハ殊ニ勤王之志情深厚之処、
右様之次第甚以齟齬候間、天龍寺其外江罷出候輩各早々
令帰国、福原越後儀少人数ニ而伏見ニ滞在出願之儀ハ穩
二經、其筋可申出重而御沙汰謹慎相待候様幕府方可及說
得候

歎願之筋御許容之有無ハ暫差置、一体入京之儀ハ兼而被
仰出モ有之儀、殊ニ兵器等相携不穩所業甚以如何被思召
候、就而者尚此上於諸藩モ右之御趣意ヲ以テ天龍寺其外
江屯集之輩早速引弘帰国致候様精々尽力説得可有之旨御
沙汰之事

右之通從御所被仰出候間相達候事

右達ノ受書ハ翌八日八ツ時ヲ限り而シテ長州人ノ引取ハ十
一日ヲ期限トシテ論說スルニアルモ、其成功頗ル困難ナレ
バ先ヅ一橋家・会津家ノ家臣ト商議シ、八日稲葉閣老ノ公

用人内田孫助ニ面会シテ左ノ旨ヲ報セリ

昨日被仰渡候御書付之趣篤ト勘考仕候ニ微力ナル私式ノ
能クシ難キ所ナリ、然ルヲ徒ニ御受ヲ為スハ食言ノ恐ア
リ、乍去厚キ御沙汰之趣ヲ辞退スルハ尚更恐懼ニ勝ヘザ
ルヲ以テ、カノ及ブ丈ケハ同僚協力シ説得ニ務ムベシ
斯クテ此趣ヲ福山ニ報シ、七月九日左ノ説得書ヲ京都長州
屋敷ニ送付シ以テ説論ニ着手セリ

今般尊侯之御勅勘為御哀訴諸君御出張、因・備・対三藩
江御別冊御別紙御頼越、於各藩夫々主君江申達周旋致
候様トノ御儀、御臣子之御情分御尤ニ奉存候、折節寡君
主計頭初家老共何モ在邑中ニ付申聞候上ニ無之而ハ御廻
章執達等之儀致兼候得共、尊藩之儀ニ付而ハ苦心致居候
儀モ有之、然ル処微力之弊藩御來談有之、乍不及某々共
申合熟慮致居候内此度朝幕方尽力周旋候様蒙御沙汰恐入、
此上ハ御趣意徹底候様飽迫御折檻致候筈ニ候得共、尊藩
ニハ從來御定説モ被為在、此度之此御出張ニ至而ハ固御
一同御衆議之上ニモ可有之、然ルニ某等一両輩彼是御忠

告致候迎一髮千鈞無詮事ト奉存候、乍去前件御頼談有之上二天幕方公然御沙汰ヲ蒙候、袖手黙止致候訳無之、且当局者迷傍觀者明ト申儀モ有之旁愚意之儘左二縷述致候間、千慮一得トモ思召愚者之微衷御採用被下候得者、国家之御為ハ申迨モ無之某々ニ於テモ本懐不過之事ト存候扱尊藩御心情之儀ハ奉勅始末及此度石清水ニ而御愁訴之通、尊王攘夷之大典ヲ御振興赫々神州醜虜之汚辱ヲ不被為受、天朝并幕府ニ於テ神祖及神君へ御忠節被為尽候様トノ御趣意ニ而、戊午年来東西御奔走二百年廢典之御上洛ヲモ御慫慂被成、御国是御一定攘夷之御大基本被為立候様御周旋有之、於御本藩ハ諸藩江御先立千昨夏数度之御戰爭モ被為成候処、去八月来君侯様御父子御入京御差扣、三条殿御初七卿方御帰京不被指許ニ付、御一藩御痛心ニ不被為堪早速ニモ御出京御歎訴モ可被成歟之処、天威ヲ御嚴憚且ハ諸大藩之忠告取計モ有之、旁以御謹慎御閉塞英明之御裁断御待被成居候処、当時国家多事之折柄于今分明之御処置無之ニ付、三百日之御鬱懷不被為得止

此度之儀ニ押移、兔二角御宿願御遂被成度御思慮御切迫之儀ト乍申、不肖モ御情実推察致無御余儀事ニ奉存候へ共、形勢^難之場所々々御多勢御屯集、戦具等御持越旗ヲ以行列ヲ被押、又ハ山木ヲ伐取仮屋ヲ取建、山上方四近眺瞰等之儀モ有之哉ニ相聞へ、人心動揺耳目驚駭上下之疑惑ヲ生シ、兵戈ヲ以被要上只管朝家へ御脅迫被成、從來之尊攘ハ仮托^託口実ニシテ真之尊攘ニハ無之ト巷論街議逐日沸騰、御氣之毒千万之次第ニ奉存候、去迎諸君ニハ天地鬼神ニ対シ毫髮モ曖昧之儀無之上ハ、外貌嫌^疑ハ御構不被成トノ御底意ニ可有之候へ共、眼前斯々之形迹有之候而ハ瑣末之事タリトモ天幕ハ勿論天下万口江如何御弁解可被成哉、尤右等之次第素方諸君之御存意ニハ無之、少年果敢之方々御心中御鬱滯之余自然ニ発洩致候歟ト奉存候へ共、諸君御引纏有之之上ハ聊疎放無之様鎮定可致トノ御書面モ有之上ハ何人カ其罪ニ任シ可申、就而ハ御願意貫徹難致而已ナラス御疑念モ一層相増可申ト窃ニ痛心致候間、此処御自省有之度、何分胸中之心情ハ識者モ難

察事上之形迹ハ易睹、執法者ハ事迹ニ就而曲直理非之裁
 断致候間、縦令心情ハ如何程考悌之意懇篤ニ候ヘ共、鞭
 策ヲ以父兄ヘ向ヒ候者ハ不法乱暴妨ト可申、且極論致候
 ヘハ、顯隱見徹和氣愉色之筋合ニ而内外表裏齟齬致候儀
 ニ無之トモ被存候、乍去右ハ枕席上之論ニテ横槩汗馬之
 士ハ事情トモ相反シ候ヘ共、詰リ此上仮初ニモ憲刑ニ触候
 儀有之而ハ多年尊攘之御宿志モ忽爾ニ消失、呉々歎惜之
 至殊ニ当節外寇差迫リ御国内正氣作新ノ折柄、尊攘之志
 有之者ハ一人ニ而茂助長致度処、奮發激励之尊藩方シテ
 天幕之御逆鱗上下之責言御招候而ハ、於尊藩ハ御頓着モ
 被成間敷候ヘ共、実以国家安危之決士氣消長之機ト日夜
 不堪憂慮候、尊藩ニ而茂尊攘之御衷情百折不撓之処方斯
 成行事ニ付、何事モ皇国之御為ト御猛省此上鎮定瑣末之
 事迨モ恭順ヲ被為窮、哀訴愁願之御旨趣徹底之為御一同
 御引弘有之候ヘハ、叡慮御遵奉台旨御恭順之御心事有始
 有終毫髮間然無之、乍併折角御出張ニ而容易ニ御引取之
 儀御遺憾而已ナラス、武門之意地ニ而天下ヘ御面目無之

扨ト申論モ可有之候得共決而左様之訳有之間布、御主君
 之御謹慎為御分疏百数十里掛隔リ候遠地御多勢御出張之
 処尚又天幕之御旨趣ヲ被奉速ニ御退去有之候得者、尊攘
 之御旨趣モ前日ニ倍蕪天下之士民益君臣之大義ニ感服仕、
 天幕ニ於テハ其御同情御同察御汲分モ有之、因以此上御
 奮發攘差之儀モ速ニ御手始、諸藩之輔翼モ一層相増シ上
 下精勤可致ト恐察仕候、然ルニ依然御滞在有之候而ハ君
 臣曲直ヲ不論処方無御余儀干戈相接候様成行、輦下騷擾
 被為惱宸襟候而已ナラス海内紛乱、外寇虚ニ乘シ奸徒私
 ニ信ヲ通シ掃攘之聖旨為之閉塞、正義ノ諸藩モ為之撓折
 草莽、慷慨之士モ為之殲滅、四民塗炭ニ苦ミ四分五裂土
 崩瓦解不可言不可見之姿ニ成行、折角之御宿志徹底不致
 ハ必然之儀ト奉存候間、此辺篤ト御熟考万事皇国之御為
 ト被思召一同ヘモ御説得候様万々致冀望候、左ニ無之御
 国内ニ而徒戰徒死只管外夷之術中ニ陥リ、三千年万国ニ
 卓絶之皇国蕭牆之憂方遂ニ彼之頤使驅役ヲ受候様相成候
 而ハ、実ニ不忠不敬臣子之大罪不過之ト奉存候、全体今

般之儀平常哀訴之体ヲ以論候へハ、兵器ハ勿論双刀迨モ御脱却之上御懇願可有之筈之処、尊藩ニテハ昨年来必死御掃攘之御場合故戦砲短袴ハ御常服ト相成、刀・槍・砲・銃ハ武門之要器御携越ハ御尤トハ存候へ共、当節外寇襲来モ難計ト申内未夕帆影モ不相見畢常^(裏)之形体ニ而輒ク畿甸之地江御入込、第一被為驚宸襟候儀如何敷事ニハ無之哉、天幕ニ於テモ御心情ヲ被棄置形迹ヲ以御処置有之候得共、当節柄厚ク御熟慮騷擾無之様トノ思召方歟、既ニ大小御監察ヲ以御説得有之、尚其上ニモ是非トモ穩便落着候様ニト列藩不残御沙汰被仰出候義ニ而、宸襟之御憂勞不容易御事ト奉存候間、此上御承伏無之候而ハ独朝廷へ被為対御不敬而已ナラス列藩へノ御交誼モ相立兼可申候間、厚御熟考有之度既ニ御監察ハ御解諭有之、且列藩方モ明細詳悉御説得モ可有之候へ共、小邑微臣最早叡々弁説モ不及儀ト存候へ共、朝旨ヲ奉蒙候上ハ片時モ猶予黙止致候筈無之ト存、不取敢鄙意之儘乍急書綴文意不分明之処モ可有之候へ共、一片之赤心御推察御取捨可被下

候、以上

七月九日

福山ニテハ藩議熟評ノ上左ノ書面用人近藤図書齋シタレハ、添書ヲ附シ更ニ長藩屋敷へ送附シタリ

長藩江返答書

此度之御願書早速主計頭江申遣候処、御懇願之御至情及力候丈ハ皇国之御為周旋可致積ニ御座候、併一体此度御出張之御様子御多勢非常之体ニテ、近畿東寺辺迨モ御進入ニ付而ハ既ニ御所御閉門御警戒之事ニモ被為及、自然御強訴ニ涉候疑モ有之、反而御願旨御貫徹之妨ニモ相成可申歟ト乍失敬甚心痛致候条、兎ニ角御重職一両輩之外ハ浪華表迨御引取被置御謹慎有之候ハハ、弥攘夷之御誠実相頭レ周旋之道モ益々相開可申ト致愚考候、何卒御願慮有御座度、左候得者周旋之儀ハ乍微力モ精々其筋へ尽力可致候

又齊藤甚右衛門ヲ以テ因藩留守居役へ入説ニ及ビケルニ、

見解相違ト遂ニ書付ヲ受理セザリキ

因藩入説書

尊藩攘夷正議ニ被為在候義素方御同意感佩罷在候段申上
モ無御座候、扱為國家長藩之儀ヲ厚御周旋被成當時長藩
ト甚御親敷被成居候ニ付愚説申試候

此度長藩人大勢洛外迨詰掛歎訴有之次第定而昨秋來之儀
ニ付不堪残念、是迨ハ穩靜ニ忍居候而茂最早堪兼、且一
通り之歎訴ニテハ其心中相達シ兼候ト存無処、右之騒々
敷事柄ニ及候儀ニモ可有之候得共、君臣之名分ト申者御
座候間、昨秋來今以天威不被為霽候儀、仮令傍方離間讒
者有之故之事ニ可有候共、臣子之分際諸事始終恭敬ヲ尽
シ礼節相屈不申而ハ不相成訳、然ルニ右様騒々敷大勢軍
装ヲ以テ輦下近ク詰掛テ之歎訴ト相成候テハ、所謂雖曰
不要君而吾不信ト申類ニテ君ヲ要スル事跡ニ陥リ、是迨
勅旨遵奉義烈正議之長藩快々不満之余リ遂ニ輕拳妄動臣
節ヲ失候杯申名ヲ得可申、折角昨秋異變之節輦下ヲ憚リ

争闘之挙動無之、勅命ヲ畏リ引取候臣節ヲ一時ニ無ニ致
候訳ニ至リ、長藩之為ニモ甚可惜之所業ト被存候、右之
挙動ヲ以之事ニ候ヘハ、此後縱令立派ニ上達之時勢一転
諸事長藩之思込通り事成就候共、堂々至尊ヲ兵力ヲ以恐
嚇シ奉リテ之事跡ハ長ク後日ニ相残り、誠忠臣節ヲ守テ
之事トハ誰モ信服申間敷、一時其積悶晴可申共其名ハ間
然可致処モ有之、永久四方人心之悦服ハ相保申間敷、左
候得者其虚隙方又々事變沸起難計ハ自然之情勢ニ而、詰
リ此レ退キ彼レ進ミ彼レ走レハ此レ来リ、輦轂之下伝舎
ノ如ク西晋八王之乱之如キ儀出来、諸国内乱ニ被率而ハ
真個之攘夷ハ違無之、其内ニ劉聰・石勒晋地ヲ席捲致候類、
英仏諸夷我虚ニ乘シ是迨トハ又十倍之輕侮猖獗ヲ生シ可
申様相成候而ハ、叡慮貫徹ハ扱置益叡慮ハ被為惱候方ニ
相成可申、具々残念之至御座候、将又長藩心淵徳川家ニ
代リ天子ヲ挟ミ四方ニ号令致度トノ事ニ候ハハ絶而論ハ
無之候得共、元來左様ニハ毛頭無之奉勅始末之文ト申平
生之持論ヲ伝承致候得者、天朝・幕府へ聊相背キ候儀無

之卜ノ事、只々関東攘夷之御処置墓々敷執行無之卜申処
 方奮激担当之次第二候得者、兎角真個ニ攘夷之出来致候
 方長藩之本意ニ可有之候間、何卒不穩之所業ニ涉リ不申
 恭敬臣礼ヲ以歎訴、兎角積憤ヲ忍ヒ内乱同士撃無之様長
 藩ニ而ハ心長ク御霽威ヲ相待、尊藩坏之御周旋ヲ以天幕
 二而ハ御寛大之御処置速ニ被仰出有之、此上益尊藩御見
 込通リ諸藩家筋之差別無之国之大小ニ不拘攘夷正義之藩
 一軒モ多ク出来、皇国一体之儀ハ互ニ睦敷同心併力、其
 内私共如キ御譜代家ハ別而幕府へ申上攘夷之御成功ヲ被
 為遂候様尽力可致事ニ御座候、右様之模様相求メ候ニハ
 諸藩相軋内乱有之候而ハ迎モ立派之成功出来不申、旁以
 長藩此節要君ノ所業ニ似寄候儀長藩名節ノ為ニ惜ミ候而
 已ニ無之、皇国内乱不止之基卜不堪歎息奉存候、何卒尊
 藩ハ長藩江御親舖場方可然御説得ニハ相成申間敷哉、右
 ハ飽迨御承知之儀、殊ニ又別ニ御見込モ被為在候御儀モ
 承知不仕候得共、鄙見ニ於テ何卒尊藩之御力ヲ以下存込
 候儘申上試候、以上

更ニ左之各通ヲ用人近藤図書ヲ以テ一橋卿・会津侯へ呈出
 セシメタリ

此度長州之藩士共宰相父子勅勘被蒙居候付愁訴之状如別
 冊嘆願仕度、依之当在京之諸藩江右周旋之儀頼有之、弊
 藩へモ同様依頼申越候、右歎願之趣旨及熟覽候処、乍恐
 関東御待夷之儀方七箇之訴条悉ク適當尤卜モ不相弁候へ
 共、乍去元来攘夷之儀ニ付而ハ举国為皇朝日夜尽死力候
 段ハ実ニ嘉賞儀勿論之儀卜奉存候、然ルニ当時攘夷之勅
 詔御遵奉モ被為在、夫ニ右御順序御勉強可被為在御機會
 ニテ神州中ハ上下内外之無差別和平一致、同力ニ無之而
 ハ実ニ皇国之御碍害ニ相成候儀眼前差見候折柄ニ候処故、
 長洲之願書等過激ニ涉リ且右人数之形装挙動近畿ニ迫リ
 不敬等之廉々彼此御座候へ共、元来不軌謀叛之情実ニハ
 聊モ無之儀ニ候へハ前段之過激之廉ハ暫御寛大ニ被指置、
 何分於輦轂之下自国之争鬪相起リ候様之儀、万一人気相

立候場方卒然ト出来仕候而ハ忽内乱差起候而攘夷之御大患二相成候儀ニ付、内外大小之利害厚ク御計較是非共御穩便之御沙汰ニ而御理解、自国へ襲来之儀モ差迫リ居候間為皇国掃攘之戦功相立候様御誨諭被為在度、此如公武之御為幾重ニモ於私モ奉歎願候、勿論右辺之儀ハ申上候迨モ無之御至当之御処置可被為在義ト奉恐察候へ共、難默止不顧僭越若冠偏ニ歎願候事

右建議ノ手續ヲ了シテヨリ後福山ニ於テハ、稲葉閣老ノ御達ニ基キ左ノ書付ヲ草シ大目付大森操兵衛之ヲ齎シ早追ニテ上京シ伏見駐在ノ福原越後ニ面会ヲ求メケルニ、越後所勞トテ側用人根村左門代リテ会见シタレバ説得書ノ交附ニ及ベリ、時二七月十八日ナリ

此度推参拝顔相願候儀別儀ニモ無之、主人主計頭当今之形勢ニ心配仕乍不及皇国之御為筋ト存込、懇々私へ申付拝顔愚意為相述候事ニ御座候、右旨趣ハ今般伏見并山崎・

嵯峨ニ御多人數御屯集、乍失敬其御心意恐察仕候ニ、昨秋来攘夷之叡慮或ハ御撓シ被遊候儀ハ有御座間布哉、元来之叡慮何卒一途ニ御持張被遊度、且七卿并君侯御父子様勅勘御融解相成候様御愁訴之御事ト奉存候、此度之儀ハ実ニ皇位之御榮辱・幕府之御盛衰分別可仕ト悲哀之余リ急速推参為仕候、寡君衷情之趣不惡御聞取可被下候扱私共身分不忍言事ニ御座候へ共、幕府実ニ勅旨御遵奉之事弥墓々敷相見へ不申候方人心疑惑東西紛擾之次第、御譜代如弊藩モ右様不相成候様輔佐可仕筈之処、不行届之段愧入申候、乍去幕府ト安危存込^レ俱ニ可致之分際是迨モ建議致候儀モ御座候得共、此上是非々々幕府攘夷之御成功迅速相願候様主計頭為名代重役之者急速出府建言為仕候、最初方攘夷ノ説ハ聊動揺不仕候得共、諸事手後レ微力ニ付残念之事共ニ御座候、尊藩之儀ハ洞春公朝廷江格別之御勤勞被為在候以来之儀世人承知仕罷在、近来外夷入寇以後尊攘之正義純乎確然御据リ被為在候段、海内偷安姑息多キ中ニ尊藩ハ農商婦女ニ至ル迨敵愾之氣如

烈火、万死一生是非々々掃攘御成功叡慮貫徹国体相立候様可被成卜ノ御銳意、誠ニ感激敬服至極ニ奉存候、斯御大業之御抱負有之非常之尊藩ニ被為在候間、非常之妄言失敬之鄙説或ハ御採用可有之歟卜申上試候、抑此度之御拳動御忠憤御愁訴之体裁ニ無之、乍失敬要君之姿ニ似寄申候間、是ニ而ハ仮令御衷情之通朝廷御聞届相成候共後來士君子之公論如何可有之哉、皇朝ニテハ藤原百川執奏四十余日不退、漢土ニ而ハ申包胥乞救七日哀哭致候等之類モ有之、御名家大藩之事被成方次第ニ而ハ貴所様御忝人御愁訴被成候共天威被為霽候御儀無之卜ハ難申、斯様之御所為ニ御座候ハハ御名儀御正敷、昨年御分家讃岐守様御初メ勅命ヲ被重候而堺町御門ヲ穩ニ御引取御座候卜前後符号、天下之名節ヲ磨キ候志士如何程力敬服可仕、然ルニ右様御軍装ヲ以大勢輦下近ク御詰掛御座候ハハ、実ニ名門尊藩之御為ニ甚以相惜候事ニ御座候、勿論争乱ニハ相成申間敷候ヘ共既ニ被為惱宸襟候事卜奉恐察候、若シ万々一争乱ニモ相成鳳輦何レヘ力被為避候様之事ニ

モ相成候ハハ、海内之紛擾此時始方尊藩尊王之御美名或ハ可被為損哉モ難計、且争乱卜相成候ハハ御勝利御不利ニ不拘、明日ニモ夷賊掃攘之為ニ可死輩蕭牆之同志撃ニ身命ヲ抛、皇国許多之勇士ヲ失ヒ可惜之至、其間ニ万一隱謀抱志罷在候者有之ハ他日我志成就之基、漁夫之利ヲ可得卜傍觀冷笑可致、詰リ夷賊之為ニ吾忠勇義士ヲ驅ル道理ニ当リ実ニ千秋之遺憾ニハ無御座候哉、何卒此際之処御勘弁所希候、乍去尊藩折角斯様御出張之上ハ勿論此儘御引取モ被成間布、御愁訴之処ハ歷々大藩嘸周旋余力モ有之間敷、微力之小藩彼此申候得益モ有之間布候ヘ共、乍不及兼而其筋江見込申出置候次第モ有之、力及丈ハ周旋可仕心得ニ御座候、兎ニ角当座御堅忍有之、去四日之朝諭御遵奉御重役之外ハ一卜先御下坂之儀幾重ニモ御忠告申度儀ニ御座候、左候得者御名分御礼敬之道モ相立人心感服、是ニ而社御志願御真実ニ相貫候カト奉存候、左様相成候得者天朝攘夷不及申天下内乱無之海内一致、神州之類勢挽回、尊藩之御正義御功業有始有終、皇

国之美事誠ニ以難有儀御座候、何分所願ハ一之忍字ニ有之、小不忍則乱大謀此語御熟考奉希上候、但是迨御疎遠打過候御間ニ付、右様申上候儀尊藩之御為筋ハ申立候へ共、関東御譜代之家ニ而全ク徳川家之為周旋弁説仕候丈之事迨ト、万一御疑察御座候ハハ夫迨之儀ニ御座候、内乱相始可申哉否海内治乱之分界幕府御盛衰機関ニ御座候へハ、素徳川家之御為心配仕死力ヲ尽シ可申ハ身分至当ノ処ニ御座候、乍去右云々申上候迨眼前ニ外寇ヲ引受御国内同士打誠ニ御失策之至、皇国之御不為尊藩之御不為ト存詰、且攘夷御同論ニ御座候儘交渉言深之戒相顧候ニ違無之、乍失敬無伏蔵衷情申上候事ニ御座候、不惡御諒察可被下候、頓首

阿部主計頭内

七月十八日

大森操兵衛

斯クテ藩議ハ横浜鎖港ノ断行ト、長州強訴ノ処分ニ付テハ予テ本藩ノ素論ニ基キ建白書ヲ草シ、執政山岡治左衛門出

府ノ上更ニ江戸老職ノ意見ヲ徴シ、然ル後ニ隱居不爭齋公ノ尊慮ヲ伺ヒ以テ建白ノ手續ニ及ブコトニ決シ、山岡執政十八日京師ニ到着シタリ

此日朝議ハ長州征討ニ御治定アリ、長人之ヲ謀知シ十九日味爽国司信濃・来島又兵衛・久阪義助・真木和泉ハ兵千四百ヲ率ヒ中立蛤門ニ向ヒ又一隊ヲ鷹司邸ニ置ク、一隊薩摩・会津・越前・桑名ノ諸隊討テ之ヲ斥ク、而シテ大垣ノ兵ハ福原越後ノ軍ヲ伏見ニ敗ル

是ニ於テ京師ニ一人ノ長兵ナシ、長人此挙ヤ名ヲ哀訴ニ借リテ実ハ乘輿ヲ奪ヒ山口城ニ奉ジ天下ニ号令セントスル謀計ナリシト云フ

此戦慄スベキ謀計ハ芸藩周旋寺尾生六郎ガ我藩儒官江木繁太郎ニ語ル所ナリ、寺尾ハ後ニ薩長連合ヲ劃策スル人物ニシテ明治維新史ニ忘ルベカラル人ナリ、又文久ノ末ヨリ慶応頃マデ粟田宮ニ在リシ関根敬三方官家ニ於テ聴ク所ノ事実モ亦斯クノ如シト、粟田宮ハ今ノ久邇宮ノ御先代ナリ

而シテ毛利長門守定広（元徳）率ユル後軍數十艘二分乗シ
来リテ我輛津二碇泊ス、是ニ於テ執政安藤織馬・用人関半
左衛門・森戸鑑助・大目付余田文右衛門・馬場保之助出張
シテ退帆ヲ促スモ服セズ、遂ニ上国ニ向ケ解纜ス、時情斯^事
ノ如キヲ以テ山岡執政ハ参府ヲ止メ近藤図書之二代リ京師
ノ事変ヲ報ス

征長前役

元治元年七月廿三日朝廷左ノ勅令ヲ布ク

松平大膳太夫儀兼而禁入京候処、陪審福原越後ヲ以テ名
ハ歎願ニ託シ其実強訴、国司信濃・益田右衛門介等追々
差出候ニ付、寛大ノ仁恕以テ雖扱之更ニ悔悟之意ナク言
ヲ左右ニ寄セ、不容易趣意ヲ含ミ既ニ自ラ兵端ヲ開キ対
禁闕発砲候条其罪不軽、加之父子黒印之軍令状授国司信
濃候由全軍謀顕然候、旁長防へ押寄速ニ追討可有之事

八月 日幕府征長ノ令ヲ下シ尾張前大納言義勝ヲ総督トナ
シ、⁽¹⁾ 二十一藩ノ兵之二随ヒ我藩其先鋒タリ

十月六日尾張総督ヨリ軍議ノ為メ廿日迄ニ近国ハ藩主其他
ハ家老参集スベキ達アリ、藩老内藤角右衛門上阪ス、用人
齊藤甚右衛門・大目付馬場保之助之二随フ
軍議ノ後十一月十一日ヲ期シ広島ニ到着スベシト定メラル、
此月九日御老中松平伯耆守ヨリ左ノ旨ヲ達セラル

阿部主計頭

毛利大膳父子始御征伐之儀者御急務之事ニ付兼テ被仰付
置候、討手之面々攻掛之注進次第速ニ御進発可被遊思召
ニ而猶尾張大納言殿へ被仰出候品茂有之候間、急速出張
御同人得指揮早攻掛候様可致旨被仰出候事

斯クテ我藩隊ハ十一月朔日右翼隊先発シ、二日左翼隊之二
次キ、藩主率ユル所ノ中軍ハ三日ヲ以テ進発ス、而シテ輜
重隊等ノ広島ニ着シタルハ同月七日ニシテ諸藩隻兵タモ無
シ

右先鋒隊長山岡治左衛門之ヲ率ヒ、二日左先鋒隊長吉
田助左衛門之ヲ率ヒ、三日正方自ラ本隊ヲ率ヒ前駆
隊長安藤織馬・本隊附属内藤角右衛門之二随ヒ、総勢

三千四百三十三人出陣ス、七日広島ニ着シ東寺町諸寺院
二分屯シ而シテ本陣ヲ正清院ニ置ク

同月十二日御老中松平伯耆守ヨリ十月廿七日附ノ公達ヲ以
テ御用有之、早々出府スベキ旨ヲ達セラル、此時ニ当リ尾
張総督未ダ着広セズ、因テ其老職成瀬隼人正ニ就テ之ヲ諮
ル、隼人曰ク、総督ノ着近シ、之ヲ待テ進退スベシト、翌
十三日督府達アリ、明曉六ツ時諸藩重臣国泰寺ニ参集スベ
シ、十四日内藤老職・大森監察督府国泰寺ニ詣ル、長藩志道・
安房・齋之所ノ其藩三老職ノ首級ヲ齎シ来ル、成瀬隼人正
総督ニ代リ実檢ス、諸藩老臣皆之ニ参列ス、其夜松平安芸
守ヨリ左ノ廻達来ル

毛利大膳父子伏罪之姿茂相頭候ニ付当月十八日攻掛り日
限之儀重而一左右相達候迄攻懸リ可被見合之事

元治元年十一月十四日 尾張前大納言

二十八日召ニヨリ主君諸藩主ト共ニ督府ニ会同ス、総督諸
侯ヲ引見シ曰ク、長藩既ニ謝罪ヲ表ス、依テ此上ノ御処置
ニ各自ノ意見ヲ徴スル旨ヲ達セラル、正方帰營ノ後之ヲ重

臣ニ諮リ乃チ左ノ封事ヲ奉ル

去月廿八日被仰渡候毛利大膳父子追々伏罪候ニ付、此上
大膳父子身分並御削封且末家之御処置振御下問之趣奉畏
候、帰營之上熟考仕候得共誠以御大切之御事柄、若輩之
私御の当之御処置可申上様之見込相立不申奉恐入候、乍
去何分当今内憂外患差湊候御時節深ク御斟酌被遊、遠大
之御賢慮ヲ以御裁断被為在度奉存上候事ニ御座候、此段
御請奉申上候、以上

十二月六日

阿部主計頭

是ヨリ先キ督府ノ吉川監物へ指示セル平服条項中ノ山口城
破却ハ、其後何等ノ消息無ケレバ其督促ヲ本藩・芸藩トニ
命セラレタリ、因テ大森監察ハ芸藩植田乙次郎・寺尾生十
郎ト岩国ニ行キ監物へ談判シ、其答詞ノ次第ヲ督府ニ致ス
初メ君主ノ関東ヨリ召サルルヤ其進退ヲ督府ニ仰キケレハ、
戦期迫ルヲ以テ暫ク遅引スベク且ツ其旨ヲ督府ヨリ江府ニ
稟申スルトノ達アリ、然ルニ又十一月廿七日附ヲ以テ再ヒ
参府スベキノ命アリ、因テ之ヲ督府へ稟議シ、十二月十日

広島ヲ発シ十三日福山ニ着ス、引率ノ諸隊之ニ従フ、唯先鋒二隊ハ尚ホ広島ニ駐ル、此月廿四日東上ノ途ニ就キ而シテ広島ニ残留ノ二隊モ廿八日帰城セリ

慶応元年正月幕府ハ征長ノ事一旦局ヲ結ビタルヲ以テ大小侯伯ニ其旨ヲ達シタリ

然ルニ長防ノ国情復変シ幕府ニ抗スルノ形跡顕著ナレバ將軍家ハ御進発ノ旨ヲ布告サレタリ、是レ四月朔日ノ事ナリキ

先達御上阪之儀被仰出茂有之候処、方今長防之形勢全靜鎮共不相聞、既ニ激徒再発之趣茂有之、被為於京都候テ茂深被為惱宸襟候趣被仰達候儀有之、且先達塚原但馬守・御手洗乾一郎被差遣候御趣意若相背候得者急速御進発被遊候間、御日限被仰出候節者聊差支無之様可被致候

四月朔日

更ニ四月廿八日ヲ以テ今般將軍家長州ニ御進発ニ付、中国・四国・九州筋之諸藩国邑へ兵員備へ置クヘク、因テ正方早々帰国致ヘク達セラル

斯クテ阪以ノ諸藩へハ兵員ノ用意達セラレタリ、是ニ於テ主君ハ五月十一日江戸ヲ発シ閏六月八日帰城ス

一筆令啓達候、毛利大膳父子伏罪之儀御疑惑有之候ニ付、右為御糺大目付永井主水・正御目付戸川鉾三郎・松野孫

八郎芸州表江被遣、大膳末家并家老共之内且奇兵隊中之者茂同処江呼出、取糺之上模様ニ寄総御人数被差向候間、

石州路一之先心得ヲ以十二月十日限同処へ致出張差図相待可被申候、尤為軍目付山岡十郎兵衛被差遣候間其段可

被心得候、且又攻口之割合別紙之通被仰出候間可被其意(得脱)候、恐惶謹言

十一月七日

小笠原壱岐守

板倉 伊賀守

阿部主計頭殿

石州口討手

一之先

阿部主計頭

二之先^二

城^{軍目付}隼人

松平相模守

石州路出張

軍目付
山岡十兵衛

松平出羽守

軍目付
諏訪左源太

斯クシテ慶応元年ヲ過キ、翌二年五月長州反跡確著ナルヲ以テ左ノ旨ヲ公布シ、開戦ノ旨ヲ達セラシ（ト）ハソノ六月三日ナリキ

紀伊中納言

奥平大膳大夫

先隊総督

軍目付
落合 将監

應接差（援） 岡

軍目付
森川 主膳

征長後役

阿部信太郎

次第出張

松浦壱岐守

軍目付
金田 靱負

一昨子年家来之者共京師へ乱入禁闕江発砲之条、於大膳父子其罪難遁嚴ニモ可被仰付之处、恐懼謝罪三家老之首級備実檢其後弥恭順謹慎之趣ニ付、天幕之御主意ヲ以格別寛典

松平右近将監

二之先

軍目付
三枝 刑部

人数計

亀井隠岐守

軍目付
石川八十郎

右達書ノ旨ニ従ヒ

左先鋒隊長内藤角右衛門・右先鋒隊長下宮三郎右衛門・

前衛中山七左衛門、督府応接（援）トシテ渡辺大助附属シ

十一月廿日ヨリ兵隊ヲ繰出シ、十二月十日主君出馬シ、

十三日三次二軍ヲ駐メ、先鋒二隊ハ石州糟淵・浜田二屯シ、

出候、是迄モ至艱之国情御斟酌思威両道ヲ以国家之大典被正候処終ニ御受不致候条、天幕之命ヲ遵奉不致御裁許違背不届至極ニ付問罪之師ヲ被差向候間、此旨可相心得候、尤頑命（迷）之者ヲ御誅鋤被成候御旨意ニ付、無罪之細民末々之者ハ猥ニ動揺致間敷候

同月八日大阪ニ於テ左之二通達セラル

毛利大膳父子御裁許及違背候ニ付問罪之師被差向候旨、
被遂御奏聞候段被仰出候間此段相達候

毛利大膳父子裁許之義先般經天聽其始末申達候処及違背
候ニ付、問罪之師差向候旨遂奏聞被聞食候、大樹ニハ長々
滞阪此上模様ニ寄進発ニモ可及太儀(天)ニ被思召候、速ニ奏
追討之功奉安宸襟候様討手諸藩ヘモ可申聞旨御沙汰候事

六月七日

右等屢布令アルニ因テ去ル三日ヨリ先鋒二隊ヲシテ浜田領
益田駅ニ進マシメ、而シテ君上十三日三次ヲ発シ十九日粕
淵ニ着セラル、然ルニ春來患(ラ脱)ラル脚氣疾劇シ已ムヲ得ス
此地ニ滞留セラル

先鋒隊ガ益田ニ達セシハ十五日ニシテ未ダ陣列ヲ布カザル
ニ夜半報アリ、曰ク長兵凡二千人津和野領内横田ニ在ルモ
ノ來襲セントスルノ勢アリト、又聞ク、高津市ヨリモ亦來
ラントスト、十六日黎明ニ及ヒ駅東勝達寺ニ移リ陳ス、益

田駅ノ地タル西ニ高津川ヲ帯ヒ東ニ遠田峠アリ、北ハ海ニ
臨ミ中間平地殆下方一里民戸一千、其東ニ益田川アリ、河
東ニ万福・勝達・医王ノ各寺山ヲ負フテ水ニ臨ム、而シテ
勝達寺中央ニアリ、孤軍ヲ以テ防禦スルニ宜シ、因テ此ニ
抛ル、黄昏浜田兵來リ、遠田峠ニ陳ス、而シテ紀藩ノ援兵
ヲ促カセシニ未タ來ラズ、長藩ノ兵多田村ノ関門ヲ破リ來
テ益田市街ニ入り、散兵ヲ以テ屋宇牆壁間或ハ樹隙・堤陰
ヨリ発砲シ勝達寺ニ向テ注射ス、我兵応戦、時ヲ移シ勝敗
決セズ、日已ニ舖(浦)ニ近シ、敵兵里外ニ引去ル、十七日兵ヲ
分テ勝達寺後ノ山及ヒ寺前ノ孤邱ヲ守ル、浜田ノ兵遠田峠
ヨリ來テ万福寺ニ抛ル、然シテ紀藩ノ大兵來テ途上ニ在ル
ヲ聞ク、故ニ使ヲ發シ速ニ來テ遠田峠ノ要地ヲ搦ス可キヲ
迫ル、已刻頃ニ至リ敵兵分ツテ三隊ト為シ一ハ万福寺ニ向
ヒ、一ハ益田川ヲ隔テテ万福・勝達寺前ノ孤邱ニ向ヒ発砲シ、
一ハ勝達・医王ニ寺ニ雨射ス、彼我銃戰數時ニ亘リ勝敗決
セズ、既ニシテ万福寺危急敵兵寺門ニ薄ル、乃チ我レ一隊
ヲ分チ之ヲ救フ、殆ンド支フ能ハズ、我兵銃ヲ棄テ槍ヲ揮

ヒ飛丸ヲ冒シ突進ス、敵兵之方為メニ披靡シテ敗走ス、我兵浜田兵ト共ニ之ヲ逐フ、然レトモ敵去ルコト遠シ、窮追セズ引還ル

既ニ帰ル長ノ生兵山上ニアリ、発砲乱射スルコト霰ノ如ク頗ル劇シ、蓋シ紀藩ノ援兵遂ニ来ラズ、是ヲ以テ要地遠田峠無人ノ境トナリ敵兵路ヲ此ニ取り我背後ヲ襲ヘルナリ、因テ又山ニ登リ迎戦竟ニ一掃スルヲ得タリ、而シテ浜田ノ兵ハ山下ノ敵ニ管セズ医王寺ニ向テ去ル、於是我寡兵孤軍トナリ況ンヤ炎天連戦士卒ノ疲労スルコト棉ノ如ク復々戦フ可ラザルヲ慮リ薄暮引退ク、敵亦追躡セス、而シテ我兵ハ浜田藩ノ懇請ヲ容レ其城下ニ屯集ス、廿四日我中軍ノ前衛隊来リ合シ兵員稍増加ス、廿五日雲藩兵至ル、廿七日総督ノ先隊長安藤飛驒守各藩長ト集議シ、廿九日紀藩ノ兵周布村ニ進ミ、我カ左先鋒長浜ニ進ミ陳ス
去ル十六七両日ノ戦ニ我死傷左ノ如シ

戦死

堀越庄右衛門 瀬尾八十助 綱川馬之助

岩井亀太郎 山路忠平 門田多吉
藤井元治

負傷

菊池武三郎 藤江治部 本間 務
馬場長之助 吉川 保 堀内柵之助
和田詫美 関 陽吉 岩崎十介
森川鉄治 武田金太郎 前田小藤太
小川嘉介 桑田常治 小島市蔵
塩田幾八郎 岩崎定之助 青山直助
池田多吉 竹本岩治 旗手代吉

長防之者共高隅辺江十六日朝方押来候様子ニ付、宿寺勝達寺少シ退キ唐田峠江左右先陣々取候処、浜田境目関門追押寄津和野関門打破奇兵隊千人計致通行、右関門番人出居候処三四人即死、漸一人相助申候

其後追々近寄候報告モ有之、午刻比益田駅江押寄浜田藩方茂一之手唐田峠江繰出候二付、右藩江打合人数ハ裏手

方不意二勝達寺江押寄夫々嚴重陣取居候処、敵二道 押寄続々二手共発砲二及候二付、当方方茂二手方打出シ互二砲戦致候得共、彼八万福寺藪之向方打候二付当リモ相分不申、暫砲戦勝敗不決敵引退致退陣候事二御座候、人数兩人手負外別条無御座候、今以益田駅江対陣致候間何刻当リ又砲戦相始リ候モ難計御座候間、尚々嚴重手当罷在候間益田表家来之者申越候二付此段御届申上候、以上

六月十九日

阿部主計頭

昨十九日御届仕候後、益田駅二而十六日終夜対陣仕候処、翌十七日夜半比駅之南手江松明ヲ以登候得共謀計卜推察一向取合不申候二付、敵駅之西梅付村辺江人数引揚候処尚又敵二千人程津和野口方押来、四五百人程ハ高津駅方上陸押寄候風聞有、其後追々敵方人数川端江布列仕候間、味方二而茂夫々手配仕午刻方双方発砲及戦争、敵ハ撒兵ヲ以麻畑等繁ミ之内方多人数入替新手ヲ以砲発仕、当手ハ至而少人数殊二昨十六日方引続戦争仕、炎暑之節別而疲労仕候得共種々手配及防戦候処、未刻頃二到リ候得者

疲労相窮申候二付勝達寺・医王寺方砲発、敵陣益田駅江及放火漸ク燃立候比敵不意二裏手江廻リ後之山手方勝達寺宿陣ヲ目掛打下シ候二付、万福寺屯集之浜田人数卜一手二相成防戦仕候得共、援兵茂無御座孤軍深没之姿卜相成力窮候二付、槍・刀ヲ以敵陣益田之方江突入申候、其後死傷之程ハ相分リ不申候、尤敵方二モ死傷有之趣二候得共此辺モ確卜相分不申候旨、益田表方右近見届御為注進相越候、猶委細取調之上御届可申上候得共、不取敢此段御届申上候、以上

六月廿日

阿部主計頭

別紙御届申上候通去十七日益田表二而先手之家来共敵方多勢二被取囲、死生存亡之程不相分候様相成候二付而ハ時十九日御届申上置候得者、前衛并大筒隊繰進候処、纒之人数二而逆茂一廉之御用二茂不相立義二御座候間先大森駅二止置、拙者不快々方次第相進候節召連出張仕粉骨之御奉公相勤候心底二御座候得共、先手之家来共右様之次第二而ハ一方之先鋒一手限二而引受候義ハ相勤兼申

候二付、何卒何レニ茂相備被仰付申合セ討入申度奉存候、
無拋次第厚御憐察被成下、早々相備被仰付被成下候様偏
二奉願候、以上

六月廿日

阿部主計頭

同月廿九日左之書付一通於広島老中松平伯耆守達ス

去ル十七日石州益田表合戦之節家来共奮戦有之趣一段之

事二候、猶無油断可尽粉骨候

六月

七月十二日先是因雲諸藩之兵稍繼至而敵兵モ亦漸ク来廻ル
ノ勢アリ、総督安藤飛驒守諸藩兵ヲ管轄指揮シ各所ニ分配
屯戌セシム、而シテ我兵ハ長浜二屯ス、諸藩討議雲藩ハ蒸
氣船ヲ以テ海路ヨリシ、我藩・浜田藩ハ陸路ヨリシ、払曉
不意ニ敵營勝浦ヲ衝カントス、三藩密議既ニ決シ之ヲ飛驒
守ニ致ス、飛州依違允サス、此日敵兵浜田ヲ来襲スルノ説
アリ、是ニ於テ我兵内田村ニ進ミ以テ敵衝ニ備フ、至ルニ
及ビ何等蹤跡ナシ、斥候亦還リ報シテ曰ク、一兵ヲ見スト、
乃チ兵ヲ収メ長浜ニ還ル、十三日俄ニ敵内田村ノ南隣内村

二拋ルト、我兵雲兵ト共ニ内田ニ赴キ川ヲ隔テテ敵ト相對
ス、敵撒兵ヲ數クコト前日ノ如ク山中或ハ樹間ヨリ狙撃ス、
彼我抗戦半日ニシテ止ム、十四日敵ノ所在ヲ知ラス、十五
日又同地ニ来ル、我亦同地ニ在テ銃丸相射ルコト再昨ノ如
シ、最後雲兵格丸ヲ放テ内村ノ民舎ヲ燹クニ及ヒ彼竟ニ遁
去レリ、此日払曉敵ノ別隊ハ浜田ノ兵ヲ当摩ノ山險ニ襲フ、
事不意ニ出テ浜田兵防ク能ハズ、敗走シテ退キ周布村ニ屯
ス、紀兵ノ当摩ヲ要守スル一隊モ亦潰ユ、十六日我兵別隊
周布川ヲ隔テ防戦數時以テ敵ノ浜田ニ来侵スルヲ阻ム、然
ルニ紀藩兵先ツ走ル、松江ノ兵亦之ニ繼グ、官兵ノ振ハ
ザルスクノ如シ、敵若シ勝ニ乗ジ浜田ヲ衝クアラバ官兵ノ
歸路塞カルノ形トナレリ、是ニ於テ諸藩兵拳テ還ル、我兵
之方殿後タリ、諸藩兵皆ナ浜田ニ帰集シ翌十七日城守ノ策
ヲ議スルモ決定スルナシ、而シテ我兵城東ヲ守リ雲兵城西
ヲ守リシニ夜半陳ヲ拳テ引去ル、十八日因兵亦去ル、我藩
孤留シ寡兵ニシテ益ナキヲ以テ使ヲ城中ニ差シ後事ヲ詢ル、
彼曰ク、寡君篤疾殆ド人事ヲ弁セズ、故ヲ以テ昨夜潛ニ乱

ヲ雲州ニ避ケシム、吾儕敵ト一戦シテ亦追テ去ルノミ、我使曰ク、果シテ然ラバ寡君ト雖モ久疾ヲ以テ粕淵ニ在リ、我亦彼地ニ退カンノミ、乃チ我藩兵拳軍浜田ヲ去ル、去ルコト里許、回顧スレバ城上黒煙天ヲ蔽フ、其自ラ城ヲ焚テ去ルヲ知ル、君上既ニ之ヲ聞悉シ仰セラルルヤウ事己ニ是ニ及ヒ、而シテ懸年寡兵長ク客地ニ孤留スルハ毫モ国家ニ益無クシテ求テ禍敗ヲ招クナリ、且藩城亦敵衝ニ当ル、其變測ルベカラズ、況ンヤ己レ病中ニ在レハ速ニ帰藩戒嚴四疆ヲ固守スベシト、之ヲ軍目付山岡十兵衛ニ諮ルニ異議ナシ、乃チ諸隊ヲ引率シ還リ独リ一隊ヲ封境府中ニ留ム、他ノ諸隊ハ夷ニ七月廿日粕淵ヲ発シ廿三日帰国ス、而シテ事状ヲ紀州総督ニ進達ス

拙者先手人数石州益田表、戦争後浜田表江引揚、其後長浜村ニ相進乱入之賊徒早々打払之儀諸藩申合、御総督紀伊殿御家来江御伺中ニ相成猶申合罷在候処、去十三日暁浜田裏手内田村江賊徒寄来候旨注進有之候ニ付、即刻同所へ出張致出羽守人数申合防戦いたし候処、賊徒引退

候間出羽守人数ニハ番兵相残、拙者人数ハ其儘屯集罷在、翌十四日輕兵ヲ以賊徒昨日屯集之処相探候処尽引揚候様子ニ付、一隊之人数相残其余長浜村江引揚休息仕罷在候処、翌十五日又々寄来候注進有之候付、即刻出羽守人数并ニ因幡守人数申合三時程茂及砲戦、夕刻賊徒引退申候、昨日西村当麻山ニ茂戦争有之、同所援兵遣置候、拙者人数茂内田村江相集申候、同夜同所へ屯集、翌十六日朝五時過方猶又寄来候付右三藩申合及砲戦候処、同時ニ浜田本街道周布村江賊徒寄来、同所出張之紀伊人数・安藤飛驒守人数江戦争有之候処無程引揚ニ相成候付、往還空虚ニ相成候而ハ裏道相守候頃ニ賊徒浜田表江相廻候ハ自由之儀ニ而無詮次第ニ付、三藩申合夕刻人数引揚浜田表江相集申候、右四日之戦争賊徒死傷茂余程有之候様相見へ申候、拙者人数死傷夫卒共合三人有之候、因幡守・出羽守・右将監杯ハ四藩之人数申合浜田防戦之計略評議仕候得共、山路数多有之長賊砲戦防禦中ニ空敷少々之人数ニ而ハ難行届心配仕候得共、翌十八日ニ至リ浜田裏手三宮村山上

江人数押出賊勢相同防戦之支度罷在候処、浜田二茂迎も防戦六ヶ布一旦城下焼払立退再拵二相決候趣、諸藩人数も追々夫々引揚二相成候間、拙者茂寡少之人数二而粕淵へ滞在病氣養生罷在候事故、此地江何時相迫り候茂難計人数一同心痛仕候付、此段右近将監人数江相断人数引揚申候、無程浜田城自焼二相成候処拙者病氣今以全快不仕、歩行不自由防禦之指揮等逆茂難相成候間、一先在所表江引取惣人数者三次口江滞陣防戦之考合罷在候所、追々芸州路之形勢茂相聞且在在所表城下江茂賊徒之者忍入城壕相伺候趣茂有之、海路茂場広之事故何時寄来候茂難計浜田覆轍茂有之、守城老少之人数二而者逆茂防戦六ヶ布奉恐入候次第二可立至茂難斗、元来福山城之義ハ山陽道賊街二相当居海陸四道之源二茂御座候間、此地相破候而者賊徒京撰江之手遣茂甚便利ヲ増可申儀二付一同深心痛仕候、甚以恐入候得共無余儀惣人数領分境迨引取御差凶奉待候、此上ハ何卒石州路御先鋒御免被仰付被下領分守街専一二仕度奉願候、此段御届之上奉懇願候、以上

七月廿四日

阿部主計頭

八月十一日十四代將軍昭徳公大阪城ニ於テ薨去セラル、御齡廿一、例ニ依リ喪ヲ秘シ廿日ヲ以テ其旨ヲ達シ、一橋中納言慶喜卿軍職ヲ継ク、此月廿七日広島ニ於テ老中水野出羽守左ノ書付ヲ達ス

大樹薨去上下哀悼之程茂御察被遊候ニ付暫時兵事見合候應可致旨御沙汰ニ候、就而者は迨長防ニ於而隣境侵略之地早々引払鎮定罷在候様可取計候事

幕府ハ右勅詔ヲ達シ、更ニ九月廿九日伯州米津駅ニ於テ保科彈正忠ヲ以テ相渡シタル書付、目付有馬式部ヨリ達セラル

芸州口・石州口出張之人数并諸家人数共不残引揚候様可致旨於京都表被仰出候間、為心得相達候

九月

三年丁卯正月廿三日京都ニ於テ左ノ御布令板倉周防守達ス從御所被仰出候趣茂有之候ニ付、長防討手暫時見合相成候処、此度御国喪ニ付一同解兵可致旨被仰出候間、可被

得其意候

十月三日二条城ニ在京ノ家臣登城致スベキ旨老中板倉伊賀守ヨリ達セラル、其旨示ニ曰ク

今般將軍家政權朝廷江返上セラルル旨ヲ達シ、且左ノ書付ヲ渡ス

我皇國時運之沿革ヲ視ルニ昔王綱紐ヲ解テ相家權ヲ執リ、保元之乱政權武門ニ移テヨリ我祖宗ニ至リ更ニ寵眷ヲ蒙リ、二百余年子孫相受我其職ヲ奉スト雖モ政刑当ヲ失フ不尠、今日之形成ニ至リ至リ候^(マ)モ薄徳之所致不堪慚懼候、況ヤ当今外国之交際日々盛ナルヨリ愈朝權一途ニ不出候而者綱紀難立候間、從來之旧習ヲ改メ政權ヲ朝廷ニ帰シ、広く天下之公議ヲ尽シ聖断ヲ仰キ同心協力共ニ皇國ヲ保護セハ、必海外万国ニ可並立我カ国家ニ所尽不過之候、乍去猶見込之義茂有之候ハハ聊忌諱ヲ不憚可申聞候
同月十五日伝奏飛鳥井中納言官庁ニ於テ左之通徳川氏ヘノ御沙汰書写共在京家臣ヘ達セラル、右八十三日板倉伊賀守ヨリ達セシ旨奏聞アリシヲ以テナリ

別紙之通被仰出候、付而者御用被為在候、早々上京可有之旨御沙汰候事

祖宗已來御委任厚御依頼被為在候得共、方今宇内之形勢ヲ考察シ建白之旨趣尤ニ被思召候間被聞食候、尚天下与共ニ同心尽力致シ皇國ヲ維持可奉宸襟御無沙汰候事

右ノ朝旨ハ君上福山ニ於テ拝承アリシモ當時重患褥中ニ在リテ上京スル能ハサル次第ヲ進達セシニ、名代重臣ヲ差出スベキ命アリ、因テ内藤角右衛門ヲシテ上京セシム

同月十六日二条城ニ於テ御所ヨリ仰出サレノ封書ニ通板倉閣老ヨリ在京家臣ヘ渡サル、其一通ハ飛鳥井卿ヨリ曩日達セラレタルモノニシテ、他ノ一ハ左ノ如シ

大事件外夷一条ハ尽衆議其外諸大名同被仰出等ハ朝廷於両役取扱、自余之義御召之諸侯上京之上御決可有之、夫迨之処支配地市中取締等ハ先是迨之通ニ而追而可及御沙汰候事

十一月廿二日君上福山城ニ卒去セラル、御齡纔ニ廿、時偶

マ革命ノ際ナレバ喪ヲ発セズ、城中小丸山ニ密葬シ法諡シテ隆徳院殿ト云フ

公弱齡ニシテ襲封シ時ニ攘夷論沸騰天下多事ナリ、天朝ノ命奉セザル可ラス、幕府ノ制動カス可ラズ、況ヤ譜代旧勲ヲ以テ幕府ノ威權日ニ傾キ一ニ外藩ノ跋扈スルヲ目睹シ其憂慮如何計リナルヲヤ、是ヲ以テ屢幕廷ニ建議シ時局ノ救済ニ勗メ、長征前後ノ役ニ方リテハ諸藩ニ先ジ軍ニ從ヒ、其石州口ノ戦ニ於テ福山藩兵ノ精銳諸軍ニ冠タリシハ、公ガ幕府ニ致スノ忠誠臣下ニ感孚スルニ非ズヤ、其不豫ノ事外間ニ伝ハルヤ領民皆ナ神仏ニ祈請シテ回復ヲ禱リ、而シテ不諱ノ漏ルルニ及ヒ十一万石ノ天地寂寞トシテ恰モ父母ヲ喪フガ如シ

明治三年十月十六日本莊村小阪山ニ移座ス

十二月九日飛鳥井大納言官庁ニ於テ左ノ御書付在京家へ渡サレタリ

今度大樹奉歸政權朝政一新之折柄、弥以天下之人心居合不相附ニ於テハ追々復古之典モ難被行被悩宸襟候、且来

春御元服并ニ立太后追々大礼被為行、且又先帝御一周ニ相成候付猶更人心一和專要ニ被思食候間、先年来防長之事件彼是混雜有之候得共寛大之御処置被為在、大膳父子末家等被免入洛官位如元被復候旨被仰出候事

明治元年戊辰正月九日隆徳公三十五日ノ御忌日長州兵襲来ス、是ヨリ先キ客臘来長兵二千余人芸領尾道ニ来屯ス、一日芸藩ニ託シ来リ云、今般我藩召ニ応シ上阪ス、臣僚一半此地ニ留在ス、時宜ニ因テハ近日陸路東上スヘシ、然ル節ハ其藩封内通行允サルヘシ、我答テ曰ク、諾而シテ道路ノ説紛紛多クハ云、彼レ方ニ福山城ヲ襲ハントス、乃チ窃力ニ探蹟セシムルニ其形迹ナキニ非ス、因テ前監察大森操兵衛ヲ再度尾道ニ遣ハシ長州参謀ニ面接シ我国論情実ヲ陳述セシメントスルニ、参謀杉孫七郎病ニ托シテ之ヲ辞ス、斯クスルコト二次、遂ニ来意ヲ達スル能ハズ、操兵衛止ヲ得ス事ヲ芸藩ニ附托伝言セシメテ回ル、昨八日ニ至リ領内今津・神辺二駅ヨリ報アリ、曰ク、長人今日二駅ニ宿シ備前

片上ニ赴クノ先触アリト、領民又報ス、長人今津・松永村ニ宿ヲ命シ明曉丑刻発程為メニ兩度ノ糧食ヲ弁セシムト、又尾道ノ人頃日細作ヲ命シ置シ者ヨリ飛報ス、長人明曉官道及藁江峠鞆津三道ヨリ兵ヲ進ム、其意拔城ニ在ラント、是ニ於テ乃チ我藩ノ危難逼テ明日ニ在ルヲ知ル、老臣以下集議相決ス、兵必ス名アルヘシ、彼勤王ノ官軍ナラバ縦ヒ聊暴戾ノ挙動アルトモ我ハ屈忍決テ對抗スヘカラス、若シ否ズ我カ方向順逆ヲ問ハス其威力ニ任セテ横道無礼ヲ恣ニスルノ兵ナラハ、闔藩一心奮戦シテ社稷ニ殉フヘシト、先ヅ操兵衛ヲ今津駅ニ遣シ彼ノ来意ヲ問ヒ尚我カ情ヲ通セシム、夜半馬ヲ馳セ還テ曰ク、名刺ヲ參謀ノ宿所ニ投シ一面ヲ乞フ、彼只諾シテ引見セス、再四促スニ事ヲ左右ニ托シテ空シク時刻ヲ移ス、而シテ其兵隊既ニ業已ニ街道ニ布列ス、其意知ルヘシ、速ニ守備ヲ為スヘシト、是ニ於テ兵ヲ城内ニ収合シ諸所ヲ保守セシメ一卒ヲ外出セシメス、嚴ニ戒令ス、縦ヒ彼ヨリ発砲ストモ我ニ在テハ藩令有ルニ非レハ一小弾タリトモ決シテ放ツ可カラズト、既ニ黎明ニ至リ長人

戦書ヲ水越閑吏ニ渡ス

今般上国ニ於テ薩芸土并弊国ヨリ兼而為御守衛差出置候人数ニ対シ徳川氏方戦争相始候処、畢竟去卯冬自天朝被仰出候王政御復古之儀相妨候旨意即朝敵ト存候、然ル処貴藩ハ從來徳川氏ト君臣之儀有之事故飽迫存亡ヲ共ニ被成候ハ勿論ニ付、勤王之諸藩申合兵馬差向候間御用意可被成候、以上

戊辰正月

長州各中

福山藩家老中

我即チ復書ヲ遣シ曰ク

勤王ノ兵馬ナレハ天下誰カ敢テ之ニ抗スル者アラシヤ、徳川氏我ニ於テ主家ナレトモ朝敵ノ罪アル上ハ之ニ随從シテ王師ニ向ヒ弓彎ノ理ナシ、猶使者ヲ以テ陳疏スヘシ既ニ復書ヲ発シ參政・監察諸人ヲシテ長兵来路ニ向テ応接ニ赴カシムルニ、其長鋒ニアル者皆麾シテ受ケス、辰牌長兵已ニ四方来圍シ大砲ノ巨弾霹靂城内ニ飛来ス、其銃隊来

進大手南門ニ逼ルニ及ヒ、老臣吉田水山・側用役石川文兵衛門ヲ開キ出テ砲丸ヲ冒シ進テ一小隊長ニ面シ反覆討論ス、隊長水山・文兵衛ヲ道傍ニ待タシメ往テ決ヲ參謀ニ取リ還テ承諾ヲ告ク、乃チ止戦ヲ約シテ還ル、時ニ參政三浦吉左衛門ハ今晨ヨリ出テ長人応接セントスルニ、皆肯テ接セサルコト前ノ如シ、彼此巡回セシニ我カ復書ヲ齎ス駛卒ニ逢フ、其書ヲ執テ懷ロニシ猶長兵ノ来路ニ向ヒシニ、參謀杉孫七郎等神島橋ヲ渡リ来ルニ乃チ復書ヲ出シ藩旨ヲ述ブ、孫七郎一読シ城中ニ於テ重臣ト談判スヘキヲ告ク、吉左衛門馳還テ之ヲ報ス、偶城後ノ砲声甚烈也、或ハ我兵ヨリ発スル者ニシテ事ヲ誤ルモ知ルヘカラスト、吉左衛門嚴ニ止戦ヲ号令シ水山・文兵衛出テ孫七郎等ヲ迎フ、時ニ城北八幡山ニ陣セシ長兵城墻ヲ破テ乱入ス、我兵隊中幼弱ナル者ノミニ小隊ヲ編シ此所ニ在リ、敵ノ乱入ヲ見ルニ堪ヘス、胸壁ヨリ一斉ニ連発ス、長兵潰走生兵代リ又発撃ス、長人死傷アリテ我幸ニ一人ヲ損セス、斯ル処ヘ彼レ止戦ノ令至ル、孫七郎等既ニ城内ニ来リ、大書院ニ於テ座既ニ定

マルヤ重臣佐原作右衛門・下宮三郎右衛門・内藤角右衛門等九人応接、吉左衛門・文兵衛副座談判、一時許ヲ経テ定ル、重臣大義滅親朝命遵奉ノ旨連署ノ証書ヲ与ヘ、彼亦然ル上ハ以後勤王同心協力勿論ナリト報書ヲ致シ、晡時長人尽ク引去ル、夜ニ入り薩州軍艦海路来襲、鞆港ニ繫泊、戦書ヲ致ス長人ノ如シ、參政岡田伊右衛門、三浦吉左衛門ト俱ニ鞆港ニ於テ応接ス、既ニ長人ト講和ノ後ナレハ一彈丸ヲ放ツニ至ラス、長人ト同例ノ証書ヲ交換シテ去ル、再翌十一日杉孫七郎今津旅館ヨリ来ル、其主毛利大膳大父子ノ使者ニシテ同盟親睦ヲ結ブ也、其後我ヨリモ使者ヲ山口ニ遣シ聘問報答ス

十五日、去ル九日京都ニ於テ左之御書付参与衆達セラルル旨在京家臣ノ飛報アリ

徳川慶喜天下ノ形勢不得止ヲ察シ大政返上將軍職辞退相願候ニ付、朝議之上断然被問食候処、唯大政返上与申而巳ニ而於朝廷土地人民御保不被遊候而ハ御聖業難被為立、

尾紀二藩ヲ以其実効御訊問被遊候処、於慶喜者奉畏入候得共、麾下并会桑之者共承伏不仕、万一暴挙可仕哉毛難計候二付、只管鎮舞之尽力仕居候旨尾越及言上候間、朝廷ニハ慶喜之恭順ヲ尽シ候様被思召既往之罪不被為問寛大之御処置可被仰付之处、豈凶ンヤ大阪城江引取候ハ素方之詐謀ニ而、去三日麾下之者ヲ引率シ剩前御暇被遣候会桑ヲ先鋒トシテ闕下ヲ奉犯候勢、現在彼方兵端ヲ開キ候上ハ慶喜反状明白始奉欺朝廷候段大逆無道、最早於朝廷御寛恕之道絶果不被得已追討被仰出候、兵端既ニ相開候上ハ速ニ賊徒御平治万民塗炭之苦ヲ被為救度叡慮ニ候間、今般仁和寺宮征討將軍ニ被任候、付而ハ是迨偷安怠惰ニ打過或ハ両端ヲ抱キ候者ハ勿論、仮令賊徒ニ從ヒ譜代臣下ノ者タリ共悔悟憤発国家之為尽忠之志有之輩ハ寛大之思召ニ而御採用可被為在候、依戦功此行末徳川家之儀ニ付歎願之義茂候得共其筋ニヨリ御許容可有之候、然ルニ此時節ニ至リ不弁大義賊徒ト謀ヲ通シ或ハ潜居為致候者ハ、朝敵同様嚴刑ニ可被処候間、心得違無之様可致

事

此月廿五日芸藩重臣兵隊ヲ率ヒ錦旗ヲ奉シ尾道ニ着ス、蓋シ順逆ヲ弁セザル列藩ヲ征セントスルナリ、乃チ三浦十郎左衛門ヲ遣リ彼ノ重臣蒲生司書ニ接見ス、左ノ書詞ヲ受ク備後・備中処置方別紙之通蒙朝命候二付、家来蒲生司書へ申合先手人数差出候間、御国論委細可被仰聞ト存候

別紙

安芸少将江

徳川慶喜反逆妄挙有之上者、備中国河辺以西備後国福山初是迨幕領総而征伐没収可有之旨被仰出候、宜軍威ヲ嚴ニシ速ニ可奏追討之功之旨御沙汰候事

正月十一日

今般被奉朝命錦御旗御兵馬被差向候二付、昨日於尾路家来三浦十郎左衛門江御達之趣謹承仕、主計頭御直答可申上之処病及危篤罷在候間不能其義候、則別紙之通存念ニ御座候間宜御執達被下度伏而奉願候

今般備後・備中御処置方御別紙之通被為蒙朝命候付、御

家来蒲生司書へ御申合御先手御人数被差出候間、国論委細可申旨承知仕候、方今王政御復古ニ付而者朝命ヲ一途ニ遵奉仕、皇国之御為速ニ御復古之聖業被為立候様尽力仕度志願ニ御座候、此段宜御執達可被下候、以上

慶応四年戊辰正月廿六日

阿部主計頭

正方印

安芸少将殿

同月廿七日、去ル廿五日於播州姫路中国・四国追討総督四
条中納言ヨリ左之通重臣山岡衛士へ御達アリシ旨飛報シ来
ル

福山

右予州松山為追討土州・長州差向候ニ付、為応援早々出
兵可致候事

正月廿五日

右ニ付翌廿八日先隊長堀兵左衛門・砲隊長岡田伊右衛門ヲ
シテ兵ヲ卒シ松山ニ発行セシム、松山藩既ニ帰順ヲ表セシ

ヲ以テ帰陣、其旨督府へ進達ス

同月廿九日、去ル廿日京都ニ於テ左之二通参与達セラルル
旨在京家臣ヨリ報シ来ル

別紙之通申渡候間、五畿七道大小之輩末々至迨漏脱無之
様可相触事

正月十八日

外夷之義者先帝多年之宸憂ニ被為在候処、幕府從來之失
錯ヨリ因循今日ニ至候折柄、世態大ニ一変シ大勢誠ニ不
被為得止此度朝議之上断然和親条約被為取結候、就而ハ
上下一致疑惑ヲ不抱大ニ兵備ヲ充実シ国威ヲ海外万国ニ
光輝セシメ、祖宗先帝之神靈ニ对答可被遊觀慮ニ候間、
天下列藩士民ニ至迨此旨ヲ奉戴心力ヲ尽シ勉励可有之事

阿部主計頭

今般御親征行幸被遊候ニ付大阪返御警衛被仰付候、就而
ハ御行在中其方義上阪可致駟引御沙汰候事

今般御親征行幸被為遊候、就而ハ大阪表要衝之口々御警
衛向別而肝要之事ニ付、其藩之義追而一ヶ口請持被仰付

候条、早々彼地出張御差図次第嚴重可致守衛御沙汰候事

二月

右二付藩兵一大隊ヲ海陸両途ヨリ上阪セシメ屯衛地ノ御指
揮ヲ待タシム、同月十四日左ノ命アリ

阿部主計頭

右今般御親征行幸ニ就而ハ撰海御警衛向肝要之事ニ候条、

其藩之義西ノ宮表嚴重可相守旨御沙汰候事

此月廿三日大阪行在所へ御着輦、名代三浦十郎左衛門弁事
官ヲ経テ転機ヲ奉伺ス

阿部主計頭

其藩人数ヲ以西ノ宮警衛被仰付置候処被免、天保山台場

警衛可致旨御沙汰候事

四月廿二日

閏四月五日天保山御守警之兵隊大砲打前天覽、加之叡感ヲ
蒙リ隊長以下へ御酒饌金二千疋ヲ賜ハル

今般朝政御一新之御次第被仰出候、付而者於当藩茂御趣
意ヲ奉体シ広ク衆議公論ヲ尽シ旧弊ヲ一洗、従来之門閥

ヲ不論貴賤上下之無別賢愚ヲ以テ非常之黜陟可致候間可
得其意候、仍而銘々見込有之候ハハ何事ニ寄ラズ無忌憚
来月十日迄二封書ヲ以巨細可申出、若在旨有之包蔵致置
後日ニ至リ異議有之候而者第一御趣意ニ相背候条、下民
末々迄無遅々可申出候事

閏四月

五月九日主君不例漸々危篤ナルモ他ニ血統ノ男子ナシ、因
テ浅野安芸守長勲ノ弟元次郎君ヲ養子ト為サンコトヲ朝廷
ニ出願シ、翌十日願之通被聞召届、同月廿七日元次郎君へ
家督之義願置、同日遂ニ卒去ス、年廿一

正方少ニシテ家ヲ継ギ義祖父正弘ノ志ヲ継述シテ国家ノ
事々尽瘁スルヲ以テ己ノ任トシ孜々トシテ怠ラズ、又専
ラ意ヲ藩政ニ留メ人望甚ダ盛ナリ、不幸ニシテ病ヲ獲早
世ス、士民其訃報ヲ聞キテ痛惜セザルハナシ

主君ノ卒去実ハ慶応三年十一月廿三日ナリシ、此時二当
リ將軍家大政ヲ奉還シ人心恟々故ヲ以テ喪ヲ秘シ城内
小丸山ニ仮葬シ、翌年元次郎君家督セラルニ及ビ始メテ

喪ヲ發シ、四年六月八日定福寺ニ於テ葬送ノ儀ヲ行フモ、
靈柩ハ猶ホ小丸山ニ収ムルコト旧ノ如ク、明治三年十月
十六日深更本莊村小阪山ニ移座ス、其墓碣ハ吉沢五郎右
衛門ノ謹書スル所ナリ

因ニ云、左ノ六人ハ正方ヲ補佐シ、当時専ラ国事ニ尽力
セルモノニシテ、就中大森操兵衛主トシテ外交周旋ノ衝
ニ当リ、関藤々陰ハ学者トシテ常ニ正方ヲ輔導シタルモ
ノナリ

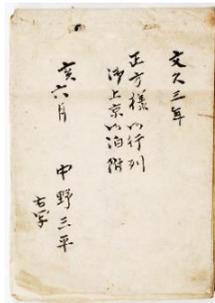
執政 山岡治左衛門(門脱)・安藤織馬(藤齊)

吉田助左工門(豊辰)

参政 齊藤甚右工門(素軒) 監察 大森操兵衛

側用役 石川文兵衛(関藤々陰)

正方様御上京御道中御行列帳



文久二年（一八六二年）二月、皇女和宮と十四代將軍徳川家茂との婚儀が成り公武合体が推し進められる中、幕府は攘夷の勅旨に従うことを決め、十萬石以上の大名に交代で禁裏警衛のための親兵を差し出すことを命じた。

文久元年に藩主に就任した阿部正方は、幕府に請い文久三年に京都八幡の警衛を命ぜられて江戸を立ち京都へ向かった。本資料はその時の行列の編成を記した帳面である。中ほど以降は藩士の役職とともに人名も記載されている。

文久三年

正方様御行列

御上京御泊附

亥六月

中野三平

右写

文久三年

正方様

御上京御道中御行列帳

亥六月

中野控

右写

六月廿八日 江戸御発駕
七月十七日 京御着

道程百式拾七里半七丁

(一) 但鉄砲拾四挺小道具共持之六挺八長持入ニテ末二可立

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
足軽 同 同 同

足軽小頭 此式拾人丸山組方可出

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
足軽 同 同 同

(二)

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
同 同 同 同

具足箱 片口 鎗持
御者頭 騎馬
侍

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
同 同 同 同

(三)

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
足軽 同 同 同

足軽小頭 此式拾人八在番組方可出

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
足軽 同 同 同

(四)

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
同 同 同 同

具足箱 片口 御者頭 鎗持 騎馬 侍

鉄砲 鉄砲 鉄砲 鉄砲
同 同 同 同

但鉄砲拾四挺小道具持之六挺ハ長持入ニテ末ニ可立

(五)

ピストル御筒持之 鎗持 鎗持 ピストル持之 鎗持
御広間番 同 同 同 同

ピストル御筒持之 鎗持 鎗持 ピストル持之 鎗持
御広間番 同 同 同 同

但御筒拾挺小道具共持之拾挺ハ長持ニ入レ末ニ可立

(六)

ピストル持之 鎗持
同 同 同 同

具足箱 片口 御番頭 手筒 騎馬 鎗持 侍

鎗・・・・持
同 同 同

(七)

惣雨具此間六七間程明ケ

(八)

足輕 白熊御鎗 式人

具足箱

片口 御小性頭

鎗持 騎馬 侍

足輕 白熊御鎗 式人

(九)

介添御徒士 御召御具足附之御徒士可兼之
御共之内ニテ可守之

御具足櫃 脊負御召替御具足櫃

御旗之者壹人 御召御具附御旗之者可兼之

(十)

黒化粧紐 御挟箱 式人

御持鎗

袋入鉄砲持之 御徒士 御徒士

御小馬駢

御旗之者式人

黒化粧紐 御挟箱 式人

御持鎗

袋入鉄砲持之 御徒士

(十一)

同 同 同 御刀筒 御徒士
同 同 同 御徒士組頭

同 同 同 同

同 同 同 御刀筒 御徒目付
同 同 同 御徒士

(十二)

猩々緋袋入

御持筒

足輕忝人

手代忝人

御長刀

御長柄之者忝人

猩々緋袋入

御持筒

足輕忝人

(十三)

御供頭

御広間番

御近習

帶刀御口

ピストル御筒五挺持之

御長柄之者忝人

打込忝拾人

御草履上ケ

御馬

御徒士頭

帶刀御口

御近習

御広間番

打込忝拾人

御枕鎗

御長柄者忝人

ピストル御筒五挺持之

手代り御持鎗之内兼之

(十四)

帶刀

御爪折傘持

御陸尺頭

同

御草履取

兼 具足箱

同

御床机持

御手廻り頭

同

御笠袋持

(十五)

片口

鎗持

御側御用役騎馬

侍

具足箱

片口

御小姓頭

(十六)

黒化粧紐

御挟箱

式人

鎗持

騎馬

侍

黒化粧紐

御挟箱

式人

黒化粧紐

御蓑箱

壹人

御道中表坊主之場心得

奥坊主式人

御茶弁当

御茶弁当

式人

(十七)

徒士

手筒

具足箱

片口 侍 槍持

御用人騎馬

侍 草履取

虎皮御率馬

帶刀御口

帶刀御口

徒士

(十八)

手代壹人虎皮御率馬共兼

葵御紋附御箱

壹人

御率馬

御馬柄杓

壹人

沓箱壹人

(十九)

帶刀御口

御率馬

帶刀御口

御厩小頭

沓箱

帶刀御口

御率馬

帶刀御口

(廿)

御乗物二被為召候節

沓箱

御召馬此所二入る

耆人

御馬廻り

御供頭
御徒士頭 侍三人
田中九十郎
供鎗
但無足共

(廿一)

御簾之者式人

鉄砲長持

棹

玉葉長持

棹

惣具足長持

棹

具足箱

片口
御長柄奉行

但從率之分共

御簾并竿

令具鼓長持

棹

惣雨具

(廿二)

鎗持

騎馬

御長柄小頭

侍

鉄砲

御長柄之者

同

同

同

鉄砲

御長柄之者

同

同

同

(廿三)

同

同

御長柄之者小頭

此間六七間程明々

仲押

仲押

同

同

(廿四)

兩掛

御挾箱

荷人

御召乗物

御六尺拾弐人

外二

棒頭壹人

(廿五)

御召替乗物

四人

同勢

御納戸

御籠之者
壹人

押足輕

押足輕

(廿六)

棹人

御側御用役

御道中御小姓頭心得

御小姓頭

同

石川文兵衛

阿部小重郎

吉沢五郎右工門

乗掛

乗掛

乗掛

(廿七)

長刀持

御番頭

御者頭

加籠

鼓菊庵

本道

葉籠持

乗還

渡辺造酒之丞

川場出役勤之

乗還

塩田糺

御者頭

(廿八)

御者頭

田中鯨兵衛

乗還

乗還

嶋田虎太郎
御長柄奉行

具足箱乗還

榎村敏蔵

御密書役侍
御道中御使番兼

鎗持

(廿九)

御近習御小納戸

御道中御使番

田中九十郎

乗還

乗掛

河合友蔵
御近習御小納戸兼

乗掛

御近習

麻生徳蔵

(卅)

御近習

六浦徳次郎

乗掛

堀内喜左衛門
御近習

乗掛

乗掛

中林勘之助
御近習

(卅一)

御近習

今川三平

乗掛

乗掛

大和章之助
御近習

御近習

海塩浜之助

乗掛

(卅二)

御近習
吉岡大九郎
乘掛
森戸金三郎
御近習
乘掛
東条加年吉
御近習

(卅三)

御近習
吉沢淳助
乘掛
高束銀太郎
御近習
乘掛
河合要之助
御近習

(卅四)

御近習
三上三蔵
乘掛
高野太一
御次物書
御次物書
乘掛
細野仙之丞
乘掛

(卅五)

御奥坊主
御道中御小納戸坊主兼
源斎
乘掛
伊藤誠斎
御奥坊主頭
御小納戸坊主兼
乘掛
浅子源威
御奥坊主
御道中表坊主兼

(四十)

御広間番
喜多村増馬
御広間番
富張藤平
乗掛
田上鶴之助
御広間番
乗掛
御広間番

(四一)

御広間番
岩永謙蔵
御広間番
山本勘太郎
乗還
山本新兵工
御広間番
乗還
御広間番

(四二)

御広間番
斎田市之丞
御広間番
加藤七五郎
乗還
内藤九郎右工門
御広間番
乗還
御広間番

(四三)

御広間番
坂兵馬
御広間番
御広間番
増田作之丞
御広間番
吉田武馬
御広間番
乗還
御広間番

(四四)

御広間番
中西武雄
乗還
川田二郎太
御広間番
御広間番
川崎央次郎
乗還
三好広人
御広間番

(四五)

御広間番
安藤祐輔
乗還
内田紋次郎
御広間番
御広間番
安藤半七郎
乗還

(四六)

御広間番
中山権之介
乗還
高野常五郎
御広間番
御広間番
新井進
御広間番

(四七)

御広間番
岩井辰之丞
乗還
川崎祐五郎
御広間番
御広間番
宇津野実之助
乗還

(四八)

御広間番
岩崎保三郎
御広間番
佐分利静衛
御広間番
松本末三郎
御広間番

(四九)

御広間番
堀内柵之助
御広間番
内藤銓之助
御広間番
川越光之進
御広間番

(五〇)

御広間番
小川直
御徒頭
輕部半左衛門
御広間番
江木乾吉
御広間番

(五一)

御馬方
斎藤住蔵
御右筆
高嶋鑄之助
御用人物書
掛谷保三郎

(五二)

吟味役 鎗持
内藤与口

御簾之者一人
御金方長持

御勘定組頭
御金奉行兼
岡本膳兵衛
乗還
槍持

(五三)

御勘定方
木村平次郎
乗還
玉井金五郎

乗還
藤井十助
御勘定方
御船割

(五四)

吟味役下役
田中米次郎
松月金太郎
吟味役下役

乗還

乗還

乗還

小沢惣吉
吟味役下役兼

(五五)

片口
具足箱

手筒
侍
御元
騎馬
侍

具足箱

(五六)

大目付騎馬槍侍

十人目付

乘還御元
吉田弥五左衛門

(五七)

乘還

同勢押足輕
押足輕

此間六七間程明ケ

(五八)

具足箱徒口付
御年寄騎馬侍鎗
山岡治左衛門 草り取
徒口付侍狭箱

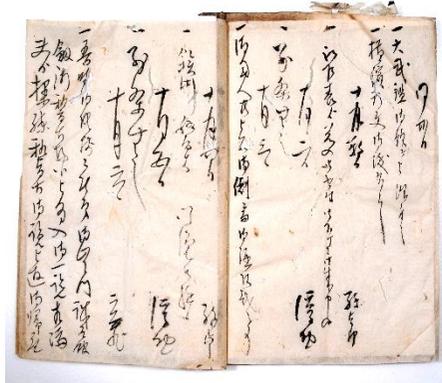
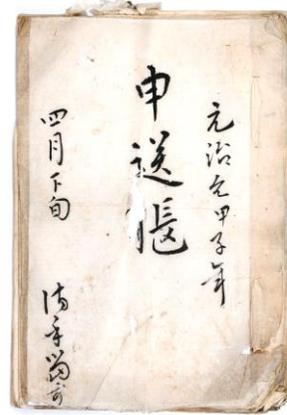
日記方

乘還 惣雨具

御跡改御徒目付
十人目付

終

申送帳



正方は、京都警衛の任を文久四年（一八六四年）二月に免
ぜられて帰国の許可を得、四月三日に福山に初入りした。
本資料は正方が福山在邑中、御手留方の三人が交代で藩主
の動静を記したものである。内容は至って簡略で、「委細御
次日記二有之」との記述が見えるが、その「御次日記」は残
念ながら所在不明である。藩校誠之館や菩提寺を始め領内諸
所を巡見し、九月に長州征討の命が届いて以降は軍備に力を
注いでいる様子がわかる。申送りは十月二十九日で終わり、こ
の四日後に追討軍の先鋒として広島へ出陣している。
随所に出てくる清心院は、先々代正弘の継室である。

元治元甲子年

申送帳

四月下旬 御手留方

四月廿六日当番

孫太郎

一 寺院御入府之御礼被為受候付、当番之内方六人御供仕、
御庭内御通抜ケ御屋方へ被為入、相濟御帰座四半時過
一大砲鑄立場江被為入候付、御供二馬御近習十人、当番よ
り七人非番より三人罷出、九半時過御出宅二而、八半時
御帰座被遊候事

一 見習もの出勤、七ツ時打相行、明日方壺人ツ、御番入

四月廿七日当番

淳助

一 五半時御供揃々次第二而定福寺江御参詣被遊、御帰座四
時過

一 九時過御館江御講釈為御聞被為入候

四月廿八日当番

三藏

一 九ツ時御供揃、九ツ半時御出宅二而誠之館江聖像江御拜

被遊、夫方諸講積御聴被遊、御帰座八ツ時迄

四月廿九日当番

孫太郎

為入候事

五月五日当番

三藏

一 明朝日於御茶屋御酒頂戴可有之処、御頭痛氣二付御延引
与被仰出候

一 奥向一統於御側御飯頂戴被仰付
一 御礼之儀頭衆江奉申上候

一 六浦氏御不、急本間・岩崎御座敷方被仰付、吉田

定御供被仰付候

五月六日当番

孫太郎頼二付
淳助

一 手鳥・篠崎・六浦・大岡、御鉄炮方被仰付、右何れも為

一 御責馬被遊候

御礼之罷出候、尤御謁之事

五月七日当番

同人

五月朔日当番

淳助

一 無別条

五月二日当番

三藏

五月八日当番

三藏

一 別条無之

一 別条無之

五月三日当番

孫太郎

三富氏頼二付
淳助

一 明四日九ツ半時御供揃二而御茶屋へ被為入、御家中一統

五月九日当番

江御酒被成下、右二付当番よりも替り合罷出候趣被申帰

一 無別条

候

五月四日当番

淳助

五月十日当番

吉沢氏願二付
三藏

一 於御茶屋御酒頂戴有之、右二付九半時御供揃二而同所被

三上氏江返番として吉沢氏出勤之処

五月十一日当番

同人江返番として
孫太郎

一別条無之

五月十七日

三蔵

一殿様四品之義仰付、当番切御祝義奉申上候

五月十八日

孫太郎

一右二付明十二日四時揃御祝義有之由、頭衆被申談候

一五半時御供揃二而誠之館へ被為入、御帰宅八半時

五月十二日

孫太郎

五月十九日 晴

淳助

一此記之通御祝義有之、夫方御屋形江被為入、表之もの御
通り掛ケ御祝義被為請候事

一四半早支度御供揃二而手城村辺江為御乗切被為入、御帰
座七時過

五月十三日

淳助

五月廿日 晴

三蔵

一表方当番書読上ケ、以来者八時過頃迄二頭衆詰所江罷越
受取候様、頭衆被申談候

一御納戸纏方箆笥受取申候、尤鍵とも
一御祝儀名面帳次第ヲ以追々申上候様被申移受取申候

五月十四日

三蔵

五月廿一日

孫太郎

一別条無之

一別条これなくそうろふ

五月十五日

孫太郎

五月廿二日 晴

淳助

一五半時御供揃二而勇鷹神様へ被為入

一相変り無御座候

一九ツ半時頃方御庭内清心院様へ被為入候事

五月廿三日

三蔵

五月十六日

淳助

一別条無之

一別条なし

五月廿四日

孫太郎頼 同人

六月一日

淳助

一 右同断

(六月二日脱)

五月廿五日 晴

淳助

六月三日

三蔵

一 別条無之

一 別条無之

五月廿六日 晴

三蔵

同月四日

同人

一 因笏様御家来土井賢蔵江御逢被遊候、尤御館江被為入

一 御書付御渡有之

五月廿七日

孫太郎頼 淳助

同 五日

淳助

一 五半時御供揃二而定福寺被為入御参詣被遊、御帰座四時

一 三富氏明六日方引込之義相達ス

頃

同 六日

同人

五月廿八日

同人

一 別条無之

一 御役場江行燈之義者不相渡候間御認物有之節者、御小納

同月七日

戸方蠟燭^(燭)受取候様与小重郎殿被談候

同月八日

五月廿九日

三蔵

四ツ時御供揃々次第^(出脱方)御宅、誠之館江被為入素読御聴聞被遊

一 別条無之

候

五月卅日

同人

一 別条無之

一 別条無之

同月九日

一作右衛門殿江御代替之御礼、諸御礼被為請候御式有之

同月十六日

同人

同月十日

淳助

一昼後八ツ時頃方清心院様江暑入御機嫌伺して被為入、御

一別条無之

婦座八ツ半時過

同月十一日

三藏

同月十七日 晴

淳助

一四ツ時頃方御屋形江被為入、諸御礼被為請、且岩井武兵

一定福寺江五半時御供揃二而被為入、御婦座四ツ時頃

衛御軍扇ヲ以御目見致申候、御婦り九ツ半時頃

一表御講釈御聞して被為入候

同月十二日

同月十八日

同人

一別条無之

一被遊候

同月十三日

淳助

同月十九日

三藏

一別条無之

一別条無之

同 十四日

淳助

同月廿日

同人

一同断

一同断

同月十五日

三藏

同 廿一日

淳助

一五ツ時御供揃々次第御出宅二而草戸稻荷社江御參詣被遊、

一同断

夫方明王院江觀音堂江被為入御拜、夫方書院江御通被遊

同 廿二日

住寺罷出御酒奉差上、相濟宝物等御一覽、夫方東照公江

同月廿三日

御拜、夫方御遠見所江被為入、御婦座四ツ半時頃

一御達面御渡有之

同月廿四日	一別条無之	淳助	一別条無之	同斷	淳助
同月廿五日	一別条無之	淳助	一別条無之	七月四日	淳助
一午後御船入御長屋方出火、忽消ル	同月廿六日	淳助	一別条無之	七月五日	同人
一別条無之	同月廿七日	三藏	一別条無之	七月六日	同人
一別条無之	同月廿八日	同人	一七夕御祝義奉申上候	七月七日	同人
一別条無之	同月廿九日	淳助	七月八日	七月八日	同人
一別条無	七月一日	同人	七月九日	七月九日	同人
一当日御祝義御謁二而奉申上候	七月二日	三藏	七月十日	七月十日	同人
一別条無之	七月三日	同人	七月十一日	七月十一日	同人
			七月十二日	七月十二日	三藏
			一五ツ半時御供揃二而定福寺江御拝礼被遊候	七月十三日	淳助
			一別条無之	七月十四日	三藏

一別条無之

七月十五日

淳助

一日映頃大夫人之御住居へ被為入、御物見江被為入御帰座

六半時頃、尚御供之者も御物見江相越

七月十六日

三蔵

一四ツ半時頃方清心院様江被為入、御帰座八ツ半時少し過

七月十七日

淳助

一相替義無之候

七月十八日

三蔵

一同断

七月十九日

一四時

(七月廿日、七月廿三日欠損)

一別

七月廿四日

一別条無之

七月廿五日

淳助

一別条無之

七月廿六日

三蔵

一別条無之

同月廿七日

同人

一上福寺江被為入候

同月廿八日

淳助

一別条無し

同月廿九日

三蔵

一九ツ時方御屋形江被為入、備前御使者水野助太夫と申者

江御逢被遊

同月晦日

淳助

一別条無之

八月朔日

三蔵

一角右衛門此間中不快二付御代替之御礼未被為請候処、今

日被為請御盃御手熨斗頂戴被仰付候事

一御席ヲ初メ御用人中・御勝手御役人共、四品御礼被仰上

候御祝儀申上、其跡二而御側向四品御礼被仰上候御祝儀

□当日御祝義申上候

同月二日

淳助

八月十日

孫太郎

一松平備前侯御使者江為御逢御屋形江被為入候

一別条御座なくそろ

同月十一日

淳助

同月三日

三藏

一別条無し

一別条無之

同月四日

淳助

一別条無之

八月十二日 晴

三藏

一別条無之

同月五日

三藏

一別条無之

八月十三日

孫太郎

一別条無之

同月六日

淳助

一別条無之

八月十四日

淳助

一三富氏明日出勤之事

八月七日

孫太郎

一

八月十五日

三藏

八月八日

淳助返番

三藏

八月十五日(六)

孫太郎

一別条無之

八月九日

三藏

一別条無御座候

八月十七日

淳助

一右同断

一別条なし

八月十八日

一 江戸表二而御達有之候御書付御下ケ

但長弐追討之儀一件忝通

八月十九日

孫太郎

一 京都表方差越候御書付忝通御下ケ二相成候二付、廿三日

付之御封書包之内江納置申候

八月廿五日

孫太郎

一 別条なし

八月廿日

淳助

一 御乗通しの事

八月六日(廿四)

同人

一 別条無之

八月廿一日

三藏へ返番 孫太郎

一 別条無御座候

八月七日(廿四)

三藏

一 京地風聞書御達書、長討手一件御書付御下ケ二相成、直々

認メ奉差上候事

八月廿二日

孫太郎

一 別条無之

八月廿八日

淳助

一 別条無御座候

八月廿三日

淳助

一 同断

八月晦日

三藏

一 江戸表おゐて御達し相成候御奉書并御書付等御下ケ相成、

尤長討一件也

一 四半時頃方清心院様江被為入、御帰座八時過

八月廿四日

一 同断

八月二日(九)

淳助

一 別条無之

九月三日

一別条無之

九月四日

孫太郎

一別条無之

九月五日

淳助

一同断

同月六日

三藏

一同断

同月七日

孫太郎

一同断なり

同月八日

一御書付下ル

同月九日

三藏

一於皇帝御席ヲ始御勝手御役人中当日之御祝儀奉申上、夫

方御側向一統御祝儀奉申上候

同月十一日

淳助

一五時御供揃御乗切二而松永辺江被為入、御帰座七半時

同月十二日

三藏

一江木氏長苧萩繪図面拜措^(世)之処、□□戻ル、奉差上候

一御書付下ル

同月十一日

一御書付下ル

一□□□下ル

同月十四日

淳助

一別条無之

同月十五日

一当日之御祝儀、於御寢間奉申上候

同月十六日

孫太郎

一別条無御座候

同月十七日

淳助

一同断

同月十八日

三藏

一同断

同月十九日

孫太郎

一 御遠馬被遊候事

同月廿六日

一 明廿日御屋方へ五ツ時被為入、周防守様御使者御目見被仰付候事

一 別条無之

同月廿七日

同月廿日

淳助

一 別条無之

三藏

一 五半時揃二而御屋形江被為入、昨記之通り

同月廿八日

孫太郎

同月廿一日

三藏

一 海塩下関二付御達之一条

同月廿二日

同月廿九日

淳助

一 明日御席一統江御酒被下候事

一 江戸表之御帳相濟候間、頭衆江戻ス

一 明後日五本松へ大砲手前御覽被為入候事

同卅日

一 明後々廿五日、御用人へ御酒被下有之

一 大武鑑御預ケ被仰付候

同月廿三日

淳助

一 横浜新文御渡有之

一 八半時揃二而御年寄衆江御酒被下有之

十月朔日

孫太郎

同月廿四日

三藏

一 江戸表方着入御書付御下ケニ相成申候

一 四ツ半時御供揃九ツ時御出營、五本松辺大炮ためし打為

十月二日

淳助

御見分被為入、御帰座七ツ時過、尤三ノ御供

一 別条無之

同月廿五日

孫太郎

十月三日

一 大林氏御仲ケ間、被仰付候事

一 御用人共被召御側二而御酒頂戴之事

十月四日

孫太郎

一別条無之

一鎗術稽古御覽被遊候

十月十二日

十月五日

淳助

一別条無之

一別条無之

十月十三日

十月六日

三藏

一御書付長征風聞書伺書×四通認メ差上、伺書之一通者御

一五ツ時御供揃々次第御出門、誠之館劍術稽古場江被為入

預ケニ相成候事

御一覽相濟、夫方操練稽古御覽被遊御帰座七ツ時過

一長州風聞書帳面一冊御下ケニ相成申候

十月七日

孫太郎

十月十四日

淳助

一

一別条無之

十月八日

三藏

十月十五日

三藏

一七ツ半時御供揃御出門、足田郡^(海)辺御巡見被遊、府中御一

一

泊被遊候

十月十六日

孫太郎

十月九日

同人

一清心院様へ被為入、夫より角場へ被為入候事

一御帰座七ツ半時頃

十月十七日

淳助

十月十日

孫太郎

一別条無之

一別条無之

十月十八日

淳助

十月十一日

一七半時御供揃六時出宅、御乗馬二而安那郡・深津郡為御

(ママ)
御巡見被為入候、尤御帰掛八尋村庄屋御宿

十月十九日

一 御帰座八半時

一 京大坂御書付~~ル~~十三通御下ケ認メ差上ル

十月廿日

淳助

一 江戸方之御書付御下ケ相成申候

十月廿一日

三藏

一 江戸方御書付御下ケ相成申候

一 夕刻御席衆江御逢被遊候

一 殿様御前髪御願之通被蒙仰候段頭衆被申聞候、右二付頭

衆迄御礼奉申上候

一 長笏之儀被仰出、委細御次日記二有之

一 鉄砲無是之事

十月廿二日

孫太郎

一 別条なし

十月廿四日

三藏

一 別条無之

十月廿五日

孫太郎

一 別条無之

十月廿六日

淳助

一 御書付御下ケ有之

十月廿九日

一 別条無之

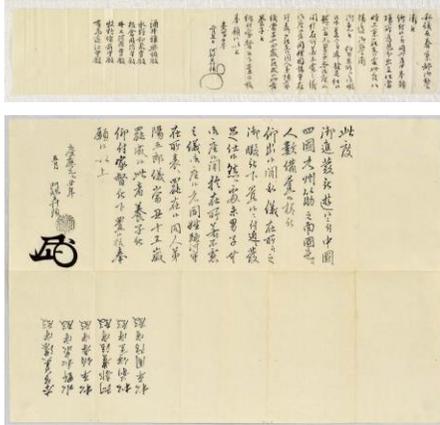
阿部正方仮養子願 (三件)

江戸幕藩体制の下、大名が嫡子を定めず亡くなればその家は断絶することになる。そこで未だ世継のいない大名は、参勤交代や任務で旅をする際、万一の事態に備えて幕府老中宛に「仮養子願」を出し、無事に江戸に戻った時に封をしたまま返してもらおうのが例であった。仮養子願は旅行の都度差し出す必要があった。

東京阿部家資料の中で正方の仮養子願として残っているのは、文久四年に京都八幡警衛を解かれて福山へ帰藩する際のもの、元治二年家康没後二五〇回忌日光大祭に際してのもの、そして慶応元年第二次長州戦争出陣に際してのもの三件である。もしもの時には分家にあたる上総佐貫藩主阿部因幡守(のち駿河守)弟陽五郎を養子とするように書き置いている。

文久四年の分は下書きも、慶応元年時の分は控えも残っている。

上 阿部正方仮養子願下書
下 同 控



私儀去春京都御警衛被仰付候二付、同六月中奉願場所為見分出立仕當時上京罷在候処、此度八幡辺御警衛御免被仰付在所江之御暇被下置候二付近々発足仕候、然ル処未男子無御座候間於在所若不慮之儀御座候者、同姓因幡守在所表二罷在候同人弟陽五郎儀当子十四歳罷成候此者、養子被仰付家督被下置候様奉願候、以上

文久四甲子年

二月廿一日 阿部主計頭 印 花押

酒井雅楽頭殿
水野和泉守殿
板倉周防守殿
井上河内守殿
牧野備前守殿
有馬遠江守殿

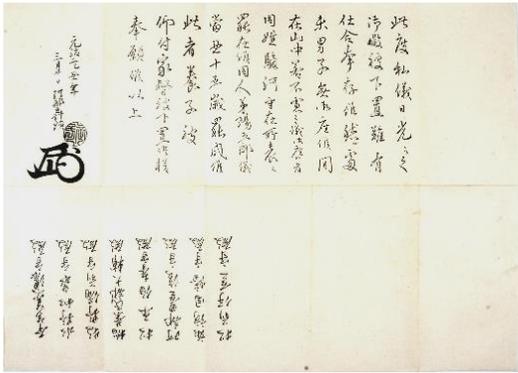


此度私儀日光江之御暇被下置難有仕合奉存候、然ル処末男子無御座候間在山中若不慮之儀御座候者、同姓駿河守在所表二罷在候同人弟陽五郎儀当丑十五歳罷成候此者、養子被仰付家督被下置候様奉願候、以上

元治二乙丑年

三月廿日 阿部主計頭 印 花押

- 本多美濃守殿
- 水野和泉守殿
- 牧野備前守殿
- 稲葉民部大輔殿
- 松平伯耆守殿
- 阿部豊後守殿
- 諏訪因幡守殿
- 松前伊豆守殿

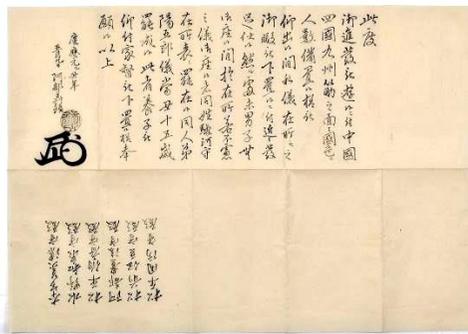


此度御進発被遊候二付中国・四国・九州筋之面々国邑江人数備置候様被仰出候間、私儀在所江之御暇被下置候二付近々発足仕候、然ル処末男子無御座候間於在所若不慮之儀御座候者、同姓駿河守在所表二罷在候同人弟陽五郎儀当丑十五歳罷成候此者、養子被仰付家督被下置候様奉願候、以上

慶応元乙丑年

五月九日 阿部主計頭 印 花押

- 本多美濃守殿
- 水野和泉守殿
- 松平伯耆守殿
- 阿部豊後守殿
- 松前伊豆守殿
- 松平周防守殿

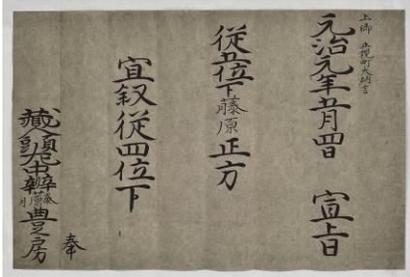


正方様四品御礼録

大名に与えられる位階は通常従五位下から始まり、従四位下へと昇進していく。本資料は藩主就任で従五位下となった阿部正方が、元治元年五月従四位下に叙せられた時朝廷へ贈った金子の請け取り書である。

江戸時代の武家官位は、事実上の任命者は將軍であるが、勅許を得て位記・口宣案が発給されることで正式に認められた。位記・口宣案を受けるに際しては天皇へ金子を進上することになっており、それが皇室や武家伝奏、上卿や実務に携わる官人などにも配分されて朝廷関係者の大きな収入源となっていた。

阿部正方
従四位下口宣案 ↓



阿部主計頭藤原正方朝臣

従四位下成御礼録之事

禁裏御所 黄金壹枚

上臈御局 銀子壹枚

長橋御局 右同断

大御乳人 右同断

執次 銀子貳拾目

親王御方 白銀参枚

高松御局 銀子壹枚

御乳人 右同断

執次 銀子拾文目

準后御方 白銀参枚

於八百御方 銀子壹枚

於五百御方 右同断

執次 銀子拾文目

内侍所 白銀四拾目

御太刀代銀子五文目

上 卿 銀子六拾目

職 事 右同断

位 記 銀子三枚

御請印 銀子六拾目

中務大輔 右同断

中務少輔 右同断

三伝奏 銀子六拾目宛

中務省 銀子壹枚

主鈴兩人 銀子壹枚宛

位記副使 銀子壹枚

雜掌六人 銀子壹枚宛

右之通請取差上銘々相渡申候、以上

野宮中納言殿家

元治元子年六月

西池主水 ㊦

木下右兵衛少尉 ㊦

飛鳥井中納言殿家

坊城大納言殿家

本多左京 ㊦

市岡式部 ㊦

山科筑前守 ㊦

浅野主膳 ㊦

吉田弥五左衛門殿

東京阿部家資料 文書編(9)

発行日 二〇一九年(平成三十一年)三月二十二日

編集

福山市経済環境局文化観光振興部文化振興課
歴史資料室

福山市霞町一丁目一〇番一号

〒七二〇・〇八一二

TEL 〇八四・九三二・七二六四

発行

福山市教育委員会

印刷・製本

株式会社 かもめいと